

2018 こです HOKKAIDO

**Collected papers
Domestic Science
Studies**

北海道高等学校長協会家庭部会

2018こです「HOKKAIDO」
【平成29年度版】
目 次

○ 巻 頭 挨拶	北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校長	吉 田 岳 夫	1
○ 挨拶	北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班 主査		佐 紺 摂 子 様	2
I 平成29年度北海道高等学校長協会家庭部会活動報告				
◆家庭部会の組織・事業内容等	北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校長	吉 田 岳 夫	3
◆(財)全国高等学校家庭科教育振興会 全国高等学校長協会 家庭部会 同北海道地区校長会 報告	北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校長	吉 田 岳 夫	5
◆平成29年度 全国福祉高等学校長会 第23回総会・研究協議会参加 報告	全国福祉高等学校長会理事	江陵高等学校長	鈴 木 譲 二	7
◆北海道高等学校家庭科教育研究協議会企画委員会報告				
1 第66回北海道高等学校家庭科教育研究協議会を終えて	北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長	北海道三笠高等学校長	佐々木 淑 子	8
2 オリエンテーション	北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長	北海道三笠高等学校長	佐々木 淑 子	10
3 研究発表				
□提言1 テーマ 生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践 ～エゾシカ肉の有効活用について～	合同研究 代表	北海道帯広工業高等学校教諭 北海道更別農業高等学校教諭 北海道帯広緑陽高等学校教諭 北海道大樹高等学校教諭	堺 香 理 田 中 裕 子 皆 川 亜希子 森 志美江	12
□提言2 テーマ 科目『生活と福祉』における少人数指導の実践について		北海道斜里高等学校教諭	松 谷 良 子	13
□提言3 テーマ 農業高校における家庭科教育の充実を目指して ～「生きる力」をはぐくむ 作物の生産から消費までの授業実践～		北海道岩見沢農業高等学校教諭	石 井 明日香	14
4 分科会報告				
□第1分科会報告	北海道天塩高等学校教諭	片 桐 和 代		15
□第2分科会報告	北海道北見柏陽高等学校教諭	竹 内 朋 美		16
□第3分科会報告	北海道穂別高等学校教諭	石 井 京 子		17
5 講 評	北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班 主査		佐 紺 摂 子 様	18

6 グループ別体験研修講座報告

□A 食育セミナー	函館大学付属有斗高等学校教諭	若狭谷 美 緒	1 9
□B 住生活セミナー	北海道札幌南高等学校教諭	高 橋 あ き	2 0
□C 保育セミナー	北海道穂別高等学校教諭	石 井 京 子	2 1
□D 消費生活セミナー	北海道札幌新川高等学校教諭	福 田 桃 子	2 2

◆北海道高等学校長協会家庭部会 調査研究委員会報告

調査研究委員長	北海道登別青嶺高等学校長	井 上 明 子	2 3
---------	--------------	---------	-----

II 平成29年度北海道高等学校家庭クラブ連盟活動報告

1 平成29年度北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動について

北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長

北海道当別高等学校長	田 村 俊 行	2 5
------------	---------	-----

2 第58回全国高等学校家庭クラブ連盟指導者養成講座に参加して

北海道札幌丘珠高等学校教諭	佐 藤 弘 子	2 6
---------------	---------	-----

3 第65回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会北海道代表出場校として

□ホームプロジェクトの部	北海道江別高等学校教諭	高 坂 瑠 美	2 7
--------------	-------------	---------	-----

□学校家庭クラブ活動の部	北海道俱知安高等学校教諭	近 藤 麻理子	2 8
--------------	--------------	---------	-----

4 第66回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会を終えて

北海道江別高等学校教諭	高 坂 瑠 美	2 9
-------------	---------	-----

III 平成29年度北海道家庭科技術検定委員会活動報告

1 家庭科技術検定の実施について

北海道高等学校家庭科技術検定委員会委員長

北海道名寄産業高等学校長	杉 田 良 二	3 1
--------------	---------	-----

2 平成29年度全国高等学校家庭科技術検定全国専門委員会に参加して

□全国専門委員（食物）	北海道名寄産業高等学校教諭	中 森 真 也	3 2
-------------	---------------	---------	-----

□全国専門委員（被服）	函館大妻高等学校教諭	西 本 千 春	3 3
-------------	------------	---------	-----

IV 家庭科教育に関する報告

1 平成29年度第55回北海道高等学校教育研究大会教科別集会家庭部会を終えて

事務局 北海道札幌清田高等学校教諭	清 野 祥 子	3 5
-------------------	---------	-----

2 平成29年度北海道産業教育フェア「さんフェア2017」を終えて

事務局 北海道江別高等学校教諭	高 坂 瑠 美	3 6
-----------------	---------	-----

3 北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会を開催して

事務局 北海道江別高等学校教諭	上 野 博 美	3 7
-----------------	---------	-----

4 意見・体験発表大会に参加して『Challenge More Spirit』

□最優秀	発表者	北海道夕張高等学校3年	二階堂 ののか	3 8
	指導者	北海道夕張高等学校教諭	中 尾 綾	

5	北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して			
	□発表校《家庭部会》	発表者 北海道三笠高等学校3年	鈴木 保乃佳	39
		指導者 北海道三笠高等学校教諭	斎田 雄司	
	□発表校《福祉部会》	発表者 北海道置戸高等学校2年	山崎 綺乃	40
		指導者 北海道置戸高等学校教諭	佐藤 由香里	
6	平成29年度初任段階教員研修 1年次研修（高等学校）「一般研修」に参加して			
		北海道小樽水産高等学校教諭	福地 成海	41
7	平成29年度北海道高等学校産業教育実技講座に参加して			
		北海道栗山高等学校教諭	山田 真規子	42
8	平成29年度産業・情報技術等指導者養成研修に参加して			
		北海道当別高等学校教諭	足達 しずか	43

V 福祉教育等に関する報告

1	第17回「福祉に関する教科・科目設置校研究協議会」を終えて			
		函館大妻高等学校長	池田 延己	45
2	第2回北海道高校生介護技術コンテストの開催について			
		江陵高等学校教諭 福祉科長	反保 遥	46
3	第6回全国高校生介護技術コンテスト秋田大会に参加して			
	北海道代表 北海道剣淵高等学校3年	星 沙紀		47
		3年	深川 愛海	
	〃 3年	佐藤 創一郎		
	北海道剣淵高等学校教諭	柏倉 早智子		

VI 各地区（ブロック）家庭科研究会の一年間の活動状況 49

1	空知管内	2	石狩管内	3	後志管内
4	胆振管内	5	日高管内	6	渡島・檜山地区
7	上川・名寄地区	8	留萌管内	9	宗谷管内
10	オホーツク管内	11	十勝管内	12	釧根地区

VII 特別寄稿

◆	「教員生活を終えるにあたり」			
		北海道置戸高等学校長	花田 祐治	55
◆	「純真でよく働き、智と技とを磨き、豊かな情操を培いましょう」			
		北海道千歳北陽高等学校長	小路 修司	56

○	編集後記	北海道三笠高等学校長	佐々木 淑子	57
---	------	------------	--------	----

巻 頭 挨拶

北海道高等学校長協会家庭部会長

(北海道江別高等学校長) 吉 田 岳 夫

日ごろより、北海道高等学校長協会家庭部会の運営に多大なるご支援を賜り、深く感謝申し上げます。今年度は昨年度を上回る194校の家庭部会への加盟を頂き、予定していました事業も全て無事に終了することができました。これもひとえに北海道教育委員会、北海道高等学校長協会、加盟各高等学校等の関係各位のご理解とご協力の賜物と心より感謝する次第であります。

さて、今年度ご縁があり、家庭部会長という大役を担うことになり、改めて「家庭科教育」を紐解いてみました。家庭科(家政学) Home Economicsの語源はギリシャ語の oikos nomos⇒oikonomosからきており、oikosは家や財を表し、nomosは経営・管理することを意味しています。そこから人的資源や物的資源を含んだ管理経営の学問という意味合いを持つことがわかりました。

我が国における家庭科教育は明治時代に女子教育として重要視されてから幾多の変遷を経て、昭和49年に高等学校における「女子の必修科目」となりました。当時の制度上、男子はその時間に体育系科目を履修しましたが、選択履修することも可能でした。ただ、男子に選択科目として家庭科を設置している高校は極めて少数でした。その後、国連における条約採択を受けて、平成6年に高校での家庭科男女必修化へと時代は変化していきました。この間に「家庭科教育」に携わった多くの先人の方々がどれだけのご苦勞をされ、現在の形となったのかは計り知れません。我々家庭科に携わる教員はその思いを十分に理解し、家庭科を学ぶ生徒さんたち一人ひとりの生涯にわたって必要となる知識・技能を習得させることが使命だと強く感じてお

ります。

全国的な傾向として、各校に家庭科の教員が、複数配置が少なくなってきたおり、個々の家庭科教員の負担が大きくなってきています。しかしながら、「家庭科」は生徒さんたちの「生き抜く力」を養うために必要な重要な教科だと強く感じております。道内においても、各校で奮闘されている家庭科の先生方に改めて敬意を表したいと思います。

その先生方の素晴らしいご指導の下、今年度においても、各校の生徒さんたちが多くの場面で活躍をしてくれたことは、大変嬉しく誇らしく感じております。3年に1度開催される「さんフェア」では、家庭・福祉に関する学科で学ぶ生徒さんたちの日ごろの学習成果を多くの方々に発信することが出来ました。また、全国家庭クラブ大会長崎大会では、学校家庭クラブの部門の俱知安高校、ホームプロジェクト部門の江別高校が大変素晴らしい発表を行い、非常に高い評価を頂きました。

さらに、食のスペシャリストを養成している三笠高校は多くのコンテストで優勝や上位入賞を果たすと同時にメディアでも取り上げられる機会が多数ありました。来年度オープンする高校生レストランに向けて一層の弾みをつけることになりました。今年度1年間を通して、意見・体験発表大会や家庭クラブ研究発表大会等における生徒さんたちの活躍、全道家庭科研究大会、福祉科目設置校研究協議会、高教研家庭部会等における先生方の熱心に研修する姿を目の当たりにし、改めて校長協会家庭部会長としての重責を強く感じたところです。

次年度以降も家庭部会に対する皆様のご支援、ご協力をよろしく申し上げ、巻頭のご挨拶といたします。

次期学習指導要領とこれからの家庭科教育

～家庭科が果たす役割の再考～

北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班

主査 佐 紺 撰 子

新しい学習指導要領等においては、教育課程を通じて、子供たちが変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力とは何かを明確にし、教科等を学ぶ本質的な意義を大切にしつつ、教科等横断的な視点も持って育成を目指していくこと、社会とのつながりを重視しながら学校の特色づくりを図っていくこと、現実の社会との関わりの中で子供たち一人一人の豊かな学びを実現していくことが課題となっています。

このことから、これからの教育課程には、社会の変化に目を向け、教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ、社会の変化を柔軟に受け止めていく「社会に開かれた教育課程」としての役割が期待されています。

このような中であって、高等学校家庭科の教育内容については、少子高齢化等の社会の変化や持続可能な社会の構築、食育の推進等に対応し、男女が協力して主体的に家庭を築いていくことや親の役割と子育て支援等の理解、高齢者の理解、生涯の生活を設計するための意思決定や消費生活や環境に配慮したライフスタイルを確立するための意思決定、健康な食生活の実践、日本の生活文化の継承・創造等に関する学習活動を充実すること、また、これらの学習により身に付けた知識・技能を活用して、「ホームプロジェクト」や「学校家庭クラブ活動」等、主体的に取り組む問題解決的な学習を一層充実することが求められています。

道教委におきましては、これまで、家庭科教育の充実に向け、創意工夫を凝らした指導例などを掲載した「高等学校教育課程編成・実施の

手引」を作成し、各学校における指導の改善を図ったり、北海道消費者協会、北海道金融広報委員会等とともに「消費者教育支援セミナー」を実施し、消費者教育の充実に努めてまいりました。

また、総合的な学習の時間においては、「探究的な（探究の）見方・考え方」を働かせて、よりよく課題を解決し、自己の在り方生き方を考えることを通して、資質・能力を育成することを目標として示す必要があることが、平成28年12月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」に示されています。すなわち、総合的な学習の時間を、より探究的な時間となるよう位置付けることであり、名称も総合的な「探究」の時間となる予定であるのは御承知のとおりです。例えば家庭科として、総合的な学習の時間の中に「ホームプロジェクト」や「学校家庭クラブ活動」における問題解決的な学習のノウハウを入れるなどできないでしょうか。学校全体の教育活動との関連を図りながら、家庭科の授業や「学校家庭クラブ活動」を工夫するなど、地域とともにある高校として、家庭科が果たす役割をこれからも検討していただきたいと思います。

先生方におかれましては、これまでも家庭科教育の充実に御尽力いただいていることに深く感謝申し上げますとともに、今後とも、御協力をお願いいたします。

最後に、家庭部会関係各位に深く御礼を申し上げます、御挨拶といたします。

I 平成29年度北海道高等学校長協会
家庭部会活動報告

北海道高等学校長協会家庭部会の組織と 今年度の事業内容について

北海道高等学校長協会家庭部会長

(北海道江別高等学校長) 吉 田 岳 夫

今年度、北海道高等学校長協会家庭部会には、昨年度を上回る194校の加盟をいただきました。加盟並びに各種のご支援ご協力をいただいたことに厚く感謝申し上げます。

今年度の本家庭部会の組織、事業内容等は次の通りとなっています。

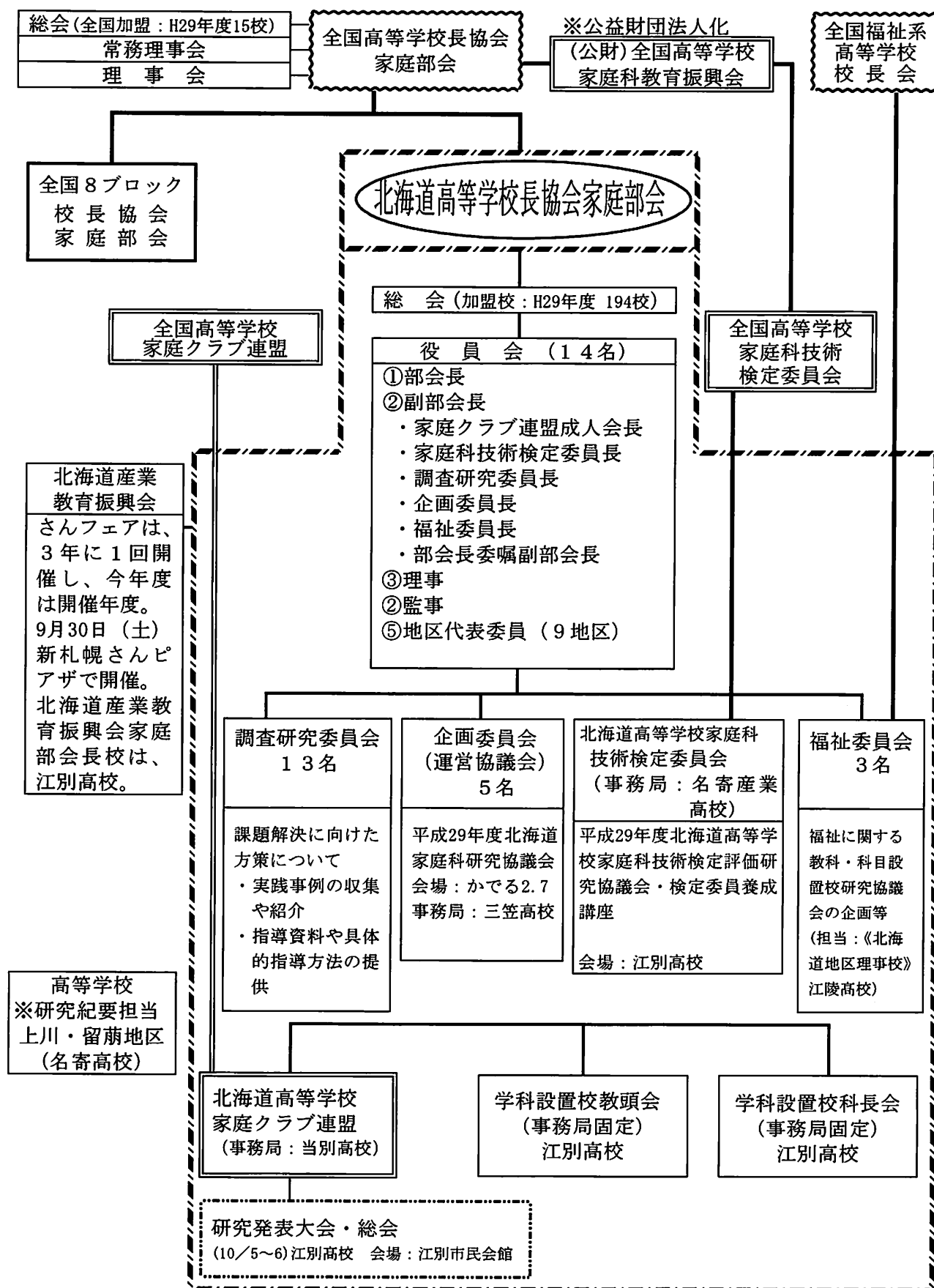
■平成29年度 部会の役員構成等

役 職	校長名・学校名	兼務する役職等
部会長	吉田 岳夫	全国部会道代表理事
	江 別	全国部会常務理事 全国家庭振興会理事
副 部会長	佐々木淑子	全国部会常務理事
	三 笠	全国家庭振興会評議員 企画委員長、道地区委員
	杉田 良二	全国技術検定道理事
	名寄産業	道地区委員
	田村 俊行	全国理事
	当 別	道家庭クラブ成人会長
	井上 明子	全国理事
監 事	登別青嶺	調査研究委員長、道地区委員
	鈴木 譲二	全国福祉部会道理事
理 事	江 陵	道地区委員
	福西 一成	
他の 道地区 委員	美唄尚栄	
	小路修司,千北陽	道地区委員
理 事	林 正憲,野 幌	
	池田延巳,函大妻	道地区委員
他の 道地区 委員	花田祐治,置 戸	道地区委員
	武田 久,倶知安	後志
他の 道地区 委員	二木浩志,帯 農	十勝
	藤井一志,釧明輝	釧根

■平成29年度 部会の主な事業

月 日	事 業 (会 場)
4/20	家庭科技術検定常任理事会(江別高)
4/21	第1回家庭部会役員研究協議会(ライフォート)
4/28	全国家庭科教育振興会理事会(全国事務局)
5/10	平成29年度家庭部会総会(ライフォート)
5/11	道家庭クラブ連盟第1回研究協議会(教育文化会館)
5/22	全国福祉校長会第1回理事会(東京)
"	全国家庭部会、常務理事会、理事会(東京)
5/23	全国家庭部会総会、研究協議会 (")
7/25,26	全国家庭科実践研究大会兵庫大会(福岡)
7/27,28	全国家庭クラブ連盟指導者養成講座(東京)
8/1,2	道家庭科教育研究協議会(かでの2,7)
8/1	全国家庭部会北海道地区校長会(")
8/2	道家庭科技術検定評価研究協議会(江別高)
8/3	道家庭科検定委員養成講座(江別高)
8/3,4	全国家庭クラブ連盟研究発表大会(長崎)
8/25	第5回家庭部会意見体験発表大会(江別高)
"	第2回北海道高校生介護技術コンテスト(北翔大)
9/22	福祉に関する科目設置校研究協議会(函大妻)
9/30	さんフェア2017(サンピアザ 光の広場他)
10/5,6	全道家庭クラブ研究大会、総会(江別高)
10/21,22	第27回全国産業教育フェア～秋田大会(秋田)
10/23,24	全国家庭部会秋季研究協議会(愛媛)
1/11	高教研家庭部会(エム・ラザ)
2/2	全国常務理事会、理事会(東京)
2/3	全国家庭クラブブロック代表会議(")
2/26	道家庭クラブ連盟第2回研究協議会(ライフォート)
"	第2回家庭部会役員研究協議会(ライフォート)

【平成29年度 北海道高等学校長協会家庭部会 組織図】



※ 線  で囲まれた部分は家庭部会の組織や事業等を示す。

(財) 全国高等学校家庭科教育振興会 全国高等学校校長協会 家庭部会 同北海道地区校長会 報告

北海道高等学校校長協会家庭部会長

(北海道江別高等学校長) 吉田 岳夫

I 財団法人 全国高等学校家庭科教育振興会

○理事会

平成29年5月22日(月) 13:00~14:00

アルカディア市ヶ谷

出席者 財団理事 吉田 岳夫(江別)

北海道代表理事 吉田 岳夫(江別)

評議員 佐々木淑子(三笠)

1 報告

○平成28年度家庭科技術検定受検状況

①被服製作	49,545人
②食物調理	99,030人
計	148,575人
前年比	-6,792人
③保育	117,808人
前年比	+1,700人

2 議事

(1) 平成28年度事業報告

主な事業～家庭科技術検定の実施

(2) 平成28年度収支決算書

▽経常収益 180,757,892円

主な収入～検定事業 152,996,200円

出版事業 21,596,780円

▽経常費用 178,939,140円

(3) 平成29年度事業計画

主な事業～家庭科技術検定の実施

(4) 財団正味財産(平成29年3月31日)

327,479,207円

(5) 理事、評議員の選出

理事長 武正 章(埼玉県立不動岡)

II 全国高等学校校長協会家庭部会

○常務理事会

平成29年5月22日(月) 14:10~14:40

アルカディア市ヶ谷

出席者 全国常務理事 吉田 岳夫(江別)

1 協議事項

(1) 全国理事会・研究協議会の運営

(2) 総会・研究協議会の運営について

(3) 調査研究委員会委員について

(4) 実践研究会ローテーションについて

2 連絡事項

(1) 第118回秋季研究協議会(愛媛大会)

(2) 第61回家庭科実践研究会(福岡大会)

(3) 第27回全国産業教育フェア(秋田大会)

○理事会

平成29年5月22日(月) 14:50~17:20

アルカディア市ヶ谷

出席者 全国常務理事 吉田 岳夫(江別)

1 報告・連絡事項

(1) 家庭部会常務理事会報告

(2) 公益財団法人理事会・評議員会報告

2 協議事項

(1) 平成28年度家庭部会事業報告

(2) 平成28年度会計決算報告

▽総収入額 14,985,324 円

主な収入～会費 11,316,000 円

6,000×1,886校(北海道14校,昨年比-10)

(3) 平成29年度家庭部会役員・財団役員

【家庭部会・財団理事長】

武正 章(埼玉県立不動岡高等学校長)

【北海道地区常務理事】

吉田 岳夫(江別) 佐々木淑子(三笠)

(4) 平成29年度家庭部会事業計画

(5) 平成29年度家庭部会会計予算

▽総収入額 14,937,493 円

主な収入～会費 11,310,000 円

6,000×1,885校(北海道15校,昨年比+1)

主な支出～事業費 8,700,000 円

研究協議会負担金 1,200,000 円

地区別校長会 900,000 円

○総会・研究協議会

平成29年5月23日(火) 10:00～16:20

アルカディア市ヶ谷

出席者 全国常務理事 吉田 岳夫(江別)

1 開会式

(1) 理事長挨拶 武正 章

(2) 来賓祝辞

文科省初等中等教育局 高見 太也 氏

産振中央会専務理事 富岡 逸郎 氏

(3) 退任校長表彰 挨拶

2 講演

「ストレス社会を乗り切る食事

～体力・気力の不調は食事から～」

食と生活研究所 管理栄養士 竹森 美佐子 氏

3 研究協議

(1) 「家庭に関する学科における学習の多

面的な評価の充実と活用に向けて」

栃木県立真岡北陵高校長 押久保 徹

(2) 「共通教科『家庭』で育む『生きる力』

福島県立郡山東高校長 瀬谷真理子

(3) 「家庭科技術検定の社会的評価を高めるために」

岐阜県立大垣桜高校長 渡辺美智子

(4) 「家庭学科卒業者の進路状況調査について」

千葉県立佐倉東高校長 釜范 德行

4 講話

文科省初中局教科調査官 市毛 祐子氏

III 全国校長会家庭部会北海道地区校長会

1 日時 平成29年8月1日(火)

13:30～15:50

2 会場 道民活動センターかでる 2.7

3 次第

進行: 三笠高等学校長 佐々木淑子

(1) 部会長挨拶

北海道校長協会家庭部会長

北海道江別高等学校長 吉田 岳夫

(2) 来賓挨拶・説明

全国校長協会家庭部会副理事長

栃木県立宇都宮中央女子高等学校長

日向野 勝 様

(3) 報告

○平成29年度全国高等学校長協会 総会・

研究協議会(春季大会)等について

北海道校長協会家庭部会長

北海道江別高等学校長 吉田 岳夫

(4) 協議

○平成29年度北海道高等学校長協会家庭部

会の今後の活動等について

(5) 家庭部会校長参加者数 10名

(6) 運営者

北海道三笠高等学校長 佐々木淑子

平成29年度 全国福祉高等学校長会 第23回総会・研究協議会 報告

全国福祉高等学校長会理事

(江陵高等学校長) 鈴木 譲二

<理事会報告>

理事会(総会前の2回)は例年通りの状況で開催された。主だった内容についてのみ報告。

○例年協議された組織の改変及び規約の改正について承認され、新たな組織と規約の改正が提示された。

○次年度における生徒体験発表について

○平成30年度 福岡大会について

○今年度より、昨年度まで検討を進めてきた教職員表彰規定を設けて、功績が顕著な教職員を表彰する事案について始動。

(提出期日は平成30年1月末とした)

○社会福祉・介護検定について

順調に検定を受験する者も増加傾向にある。

1級実施については次年度より実施。

○福祉科履修生の介護福祉士取得支援就学給付制度は今年度より実施。

○新たな動きについて

九州地区より「介護福祉等に係る講習」の継続実施についての要望が出され、これを受けて全国実態を把握すべく調査を実施、検討に入る。

<総会・研究協議会>

○感謝状の贈呈

新潟県立八海高等学校長：鈴木 勇二

○基調講演(厚生労働省 社会・援護局福祉基

盤課長：石垣 健彦氏)

「介護人材確保と介護福祉士への期待」

○特別記念講演(国際医療福祉大学大学院副大学院長教授：中村 秀一氏)

「社会保障の動向とこれからの福祉」

○生徒体験発表 最優秀賞(文部科学大臣賞)

東奥学園高等学校 工藤 志保

「Kさんから学んだ命の大切さ」

<教員研究協議会>

① 授業研究 東奥学園高等学校

「生活支援技術」「時短と効果」

～初めての介護実習までに介護技術を効率的に習得する工夫～

② 現場実習 滋賀県立長浜北星高等学校

「ありがとう」と「笑顔」

～「尊厳」を学ぶ「介護実習」～

③ 資格取得 北海道釧路高等学校

「介護福祉士」国家試験合格100%を目指して

～農業と福祉を学べる高校の20年の歴史～

④ 進路指導 沖縄県立沖縄水産高等学校

「福祉系列における進路指導の取組」

～地域と連携した人材育成～

○分野別情報交換会

○SPH指定校による実践報告

○文部科学省 指導・講評

第66回北海道高等学校家庭教育研究協議会を終えて

北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長

(北海道三笠高等学校長) 佐々木 淑 子

平成29年度第66回北海道高等学校家庭科研究協議会が、8月1日(火)～2日(水)の二日間、北海道立道民活動センター「かでる2・7」を主会場として開催されました。

ご来賓として、北海道教育庁学校教育局高校教育課長 山本 明敏様、全国高等学校長協会家庭部会副理事長(栃木県立宇都宮中央女子高等学校長)日向野 勝(ひがの まさる)様にお越しいただきご挨拶を頂戴しました。また、助言及び講評を、北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班主査 佐紺 摂子様をお願いしました。道内の家庭・福祉に関する高等学校の校長先生並びに先生方など100名を超える皆様にご参加いただき、お陰様で盛会のうちに初期の目的を達成することができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

さて、本会は北海道高等学校長協会家庭部会企画委員の校長6名と全道各地より選出された運営研究委員25名の先生たち及び教頭3名、そして事務局(三笠高校)3名、計37名で組織され、企画・準備・運営業務を担いました。

【本研究協議会 組織】P 9 に記載

それまで、各地区輪番制で行っていた本会の運営は、上記の運営研究員つまり家庭科教員自らが手がけるようになって今回で10年、節目を迎えた研究協議会でもありました。

さて、1日目午前中は開会式・オリエンテーションに続いて全体会Ⅰとし、報告と説明、そして各地区から研究三つが発表されました。

まず「平成28年度全国高等学校家庭クラブ研究発表大会出場報告及び指導について」と題して、現在は厚真高校(指導時は札幌丘珠高校)黒田さとみ先生からご報告いただきました。実は前年度のこの研究協議会では、札幌丘珠高校

家庭クラブの生徒さん4名が「全国高等学校家庭クラブ研究発表大会～福島大会～」へ出発する前に、『防ごう！消費者トラブル！～丘珠コミュニティが見守ります～』のテーマで発表してくれていましたので、連続性のある報告となりました。ちなみに、札幌丘珠高校は家庭クラブ活動の部において産業教育振興中央会賞を、同じくホームプロジェクトの部では札幌北高校黒須さんが同賞を受賞しました。

続く説明では、北海道高等学校家庭科技術検定事務局校である名寄産業高校 榊原しほじ先生が「北海道高等学校家庭科技術検定」の現状や受験等についてお話してくださいました。

提言については、十勝・オホーツク・空知の3地区からの発表となりました。十勝は共同発表で、帯広工業高校 堺 香里先生を初めとする他3名(更別農業(田中先生):帯広緑陽(皆川先生):大樹高(森先生))、オホーツクからは斜里高校 松谷良子先生が、空知は岩見沢農業高校 石井明日香先生が、日常の実践を提言としてまとめ発表していただきました。

【提言内容】P 12～P 14 に記載

午後からは3つの分科会と校長部会に分かれて研究協議を行ないました。三分科会とも意見や実践例等が活発に出され、意味ある分科会となりました。校長部会では、全国高等学校長協会家庭部会北海道ブロック研究協議会を兼ねていることから、全国高等学校長協会家庭部会副理事長 日向野 勝校長先生においでいただき、「全国状況等について」説明していただきました。また、道家庭部会長(江別高校長)吉田 岳夫校長からは、「全国高等学校家庭部会総会・研究協議会」等について資料を基にご報告いただきました。

分科会終了後は、全体会Ⅱとして再び参加者が集まり、各分科会の報告及び講評が行われました。各分科会では、今後の指導に生かせる充実した協議内容であったことが報告され、また、佐紺主査の講評では、各提言内容について指導と評価をいただくとともに、家庭科教育の課題についても触れられ、解決へ向けては本研究協議会の意義と家庭科教員の研修がいかに重要であるかについても話されました。

【分科会報告】P15～P17 に記載

【講評】P18 に記載

2日目はグループ別体験研修で受講者の希望通りのセミナー4つに分かれて実施しました。
A：食育、B：住生活、C：保育、D：消費生活の分野を設定しましたが、特に、C：保育セミナーにおいては、全国高等学校家庭科教育振興会の事業の一環として、保育技術検定評価研究協議会・検定委員養成講座と兼ねて実施し、受講終了者には、家庭科技術検定（保育）の検定委員の証が授与されました。また、講師も派遣していただき、受講者数44名と関心の高いセミナーとなりました。

また、他のセミナーにおいても先生方の真剣な取組が見られ、実施後のアンケートにおいても受講者の高い評価が得られました。それぞれの講座の講師をお引き受けくださった関係各位に感謝申し上げます。

【グループ別体験研修講座報告】P19～P21 に記載

以上、2日間の日程で開催された本研究協議会は、充実した研修の時間を提供し、共有することができたようです。次年度からはいよいよ新学習指導要領の動きも本格化し、実施に向け、本研究協議会もなお一層、本道の家庭科教育・福祉教育に関わる先生方の資質の向上を目指し、さらに実り多き研修・学びの場となるよう努めていきたいと考えています。

今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。そして、関係の皆様、本当に有難うございました。

【本研究協議会 組織】

1 役員

部会長	吉 田 岳 夫 (江 別)
会 長	佐々木 淑 子 (三 笠)
副会長	杉 田 良 二 (名寄産業) 井 上 明 子 (登別青嶺)
監 事	田 村 俊 行 (当 別) 林 正 憲 (野 幌)

2 運営研究員

石 狩	高 橋 あ き (札 幌 南)
	田 中 晴 美 (札 幌 東)
	伊 藤 友 美 (札 幌 西)
	東 昌 江 (札幌手稲)
	高 橋 理 緒 (札幌南陵)
	坂 口 真奈美 (札幌厚別)
	秋 田 貴 子 (札幌工業)
	柿 澤 小百合 (札幌新川)
	鈴 木 朋 美 (江 別)
	今 多 靖 子 (当 別)
	上 原 さゆり (道文教大明清)
道 南	佐 藤 美穂子 (函大付属柏稜) 若狭谷 美 緒 (函大付属有斗)
後 志	千 葉 和 代 (余市紅志) 佐 藤 慈 雨 (高 等 聾)
空 知	風 上 沙 織 (美唄尚栄) 高 橋 亜 紀 (奈井江商業)
上 川	佐 藤 有 紀 (富良野緑峰) 榊 原 しほじ (名寄産業)
留 萌	片 桐 由 貴 (天 塩)
宗 谷	成 田 佳 織 (利 尻)
オホーツク	竹 内 篤 子 (北見柏陽)
日 胆	石 井 京 子 (穂 別)
十 勝	鳥 井 晶 子 (帯広農業)
釧 根	佐 藤 奈央子 (釧路北陽)
教 頭	宮 崎 円 (江 別)
	後 藤 あゆみ (広 尾)
	佐 野 陽 子 (留 辺 薬)

3 事務局校（北海道三笠高等学校）

事務局長（教頭）	浜 出 享 里
事務局員（教諭）	斎 田 雄 司
事務局員（教諭）	水 野 未 歩

オリエンテーション

北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長

(北海道三笠高等学校長) 佐々木 淑 子

全道各地よりお集まりいただき、有難うございます。今回は100名を超す参加ということで、とても喜ばしく思っております。部会長の吉田校長先生のお話にもございました通り、この研究協議会は66回目、平成20年度より運営研究員で運営する方式に変わって10年目の記念すべき回です。運営研究員一同、力を合わせて運営しますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

さて、小学2年生になった孫が先日「おばあちゃん、なんで勉強をしなきゃならないの？」と聞くのです。いずれそのような質問が来るのではないかと書き留めておいた詩、まどみちおさんの、『朝がくると』という詩を読んでやりました・・・『朝がくると とび起きて／ぼくが作ったのでもない水道で 顔をあらうと／ぼくが作ったのでもない 洋服をきて／ぼくが作ったのでもないごはんを むしゃむしゃたべる／それから ぼくが作ったのでもない 本やノートを／ぼくが作ったのでもない ランドセルにつめて せなかにしょって／ぼくが作ったのでもない 靴をはくと／たったか たったか でかけていく／ぼくが作ったのでもない 道路を／ぼくが作ったのでもない 学校へと／ああ なんのために／今に おとなになったなら／ぼくだって ぼくだって／なにかを 作る事が／できるように なるために』

「なぜ勉強するの?」「人のお役に立てるものを作るとか、何かの役に立つ大人になるために勉強するんだよ。」これが「学ぶ」基本です。

それでは、本題に入ります。まず、昨年度の報告です。平成28年度第65回北海道高等学校家庭科教育研究協議会の参加人数については、前年度と比べ参加者数が増えました。参加者アンケートの回収率は98.6%と高く、様々なご意見

を今年度の企画に反映しました。特に「次回参加したい体験研修講座」の項目で希望の多かった「消費者教育」「環境教育」を今年度の体験研修講座に設定しております。これらのアンケート結果は次年度へ繋がりますので、今回もご協力よろしくお願いいたします。

次に会計決算報告です。合計80名の参加者の収入をもとに運営しましたが、少ない予算の中、何とか5,000円ほどの残金を出して決算させていただいております。決算報告は校長協会家庭部会の総会にて監査承認済みですので、併せてご報告いたします。

さて、今年度の研修主題、研究の観点につきましては記載の通りです。これから全体会で行う報告、説明、研究発表、提言等については、その観点をそれぞれ示しましたので、ご確認ください。また、予算は予定より人数が若干増えましたので余裕が出る見込みです。体験研修の保育については、初めての試みとして家庭科技術検定評価研究協議会と合わせ、本部からも3名の先生方にご協力いただき講座を設定することができました。お陰様で、保育セミナー参加者が多数となりました。

次に来年度の開催についてです。平成30年7月31日(火)～8月1日(水)の日程、開催場所はこのかでの2・7の予定です。次年度の各担当地区は、提言が留萌・宗谷、渡島・檜山、後志の3地区、司会が上川、胆振・日高、石狩、そして記録は、運営研究員と兼ねることができですが、釧路・根室、十勝、空知となっています。それぞれの研究会の際にでもご検討くださるようお声掛けください。また、平成31年度以降の輪番については今回作成しましたのでご確認願います。

さて、教育全般についてお話しします。現在、新教育課程がいよいよ！という時期です。

2年前もお話しましたが、AI、人工智能に人間が勝るもの、人間しかできないことは何だろう？答えは2つ。1つ目はアイデアを生み出すこと、2つ目は他の人と協力して何か価値のあるものを創り出すことです。しかし、20年後30年後は人工智能が優位性を持ってこの世界をつくっていくのかもしれませんが。現在はアイデアを生み出す、他と協力して何か価値あるものをつくるというのは、まさしく家庭科で実践している内容そのものです。先生方には自分を信じ、教科の自負心を持って、教育に携わっていただければ有り難く思うところです。

次に、諮問・答申についてです。文部科学大臣は課題があるから意見を求め（諮問）中教審等で「答」えを「申」す、から「答申」なんです。ですから答申だけ読むのではなく、この基になる諮問（課題の原点）を確認する必要があります。皆さんがテストを作るのと同じです。教育課程がこれからどういう方向で示され、私たちはどのような視点をもってやっていかなければならないのかが明確になると思います。

ある小学校6年生向けのあるサンプル問題があります。「野菜から水分が出てきました。野菜に塩と砂糖をふりかけた時、砂糖からの方が水分が多く出ました。どのように教えますか。」学ぶことは社会とのつながりを考えていくことでもあります。考える思考力、決める判断力の育成ばかりではなく、それらをいかに活用して答えを導き出すかというのが、これからの教育に最も求められているなのです。そこでこの答えですが、例えば浸透圧で答えを言う生徒もいるでしょうし、また、小学生だと「野菜に穴が空いていて水分、水の粒が出てくる」や「水の濃さが同じになるように水が移動する」と表現する児童もいるかもしれません。では、砂糖と塩の粒は？砂糖の方が粒が小さい。通常、茹でる時には塩を使いますが、本当は砂糖の方がちゃんと水分が抜けるのになぜ塩を使うのか？

今度は歴史に関連します。江戸時代には砂糖は薬と同じくらい高価で、一方、塩はとても安く手に入りました。効果が同じなら塩を使いましょう！ということで、塩を使うことが生活に定着してきたのです。このように、一つ一つの知識を繋ぎ合わせる事が、事象として一番見える「家庭科」で教えるべき内容ではないかと思うのです。これが今言われている「深い学び」に繋がります。いわゆる授業改善に繋がるアクティブラーニングの事例というわけです。

ですから、先生方は授業のマネジメントをして欲しいのです。マネジメントとは、それを仕組むということです。意味のある学びを生徒自身が創りあげられるよう、授業をどんな目的で、どのような仕掛けを用いて展開するのか、と考え仕組むことも授業マネジメントの一部と言えます。この取組が学校全体に広がるとカリキュラムマネジメントとなります。いわば、先生方はプロデューサーですね。プロデューサーは、今ファシリテーターといわれる「支援する」というような意味にもなるのですが、たぶんファシリテーターという言葉は、今後、教育の現場でも使われるようになると思いますので、頭の片隅に置いてください。

終わりに～社会は中央集権から地方分権となり、これからは地方創生の時代と言われます。中央集権の時代は $2+3=5$ というように、要素も答えも全部決まっていました。ところが、地方分権になると $0+0=5$ のように何と何を足すかということに自由度がありました。これからは地方創生、つまり、 $0+0=0$ 、すべてが工夫次第という時代です。よって、家庭科の授業を改善しながら、生徒たちの深い学び・主体的な学びに繋ぎ、生徒自身が家庭科の威力と魅力を学校全体さらに地域へと発信し、それが地域創生のきっかけとなり得る時代なのです。

この二日間の研究協議会が、先生方自身にとっても深い学びとなり、各校の家庭科の授業に生かしてくださることを期待申し上げ、オリエンテーションといたします。

提言1 生活課題を主体的に解決できる生徒の育成をめざした家庭科教育の実践～エゾシカ肉の有効活用について～

合同研究 代表 北海道帯広工業高等学校教諭 堺 香 理
北海道更別農業高等学校教諭 田 中 裕 子
北海道帯広緑陽高等学校教諭 皆 川 亜希子
北海道大樹高等学校教諭 森 志美江

1 はじめに

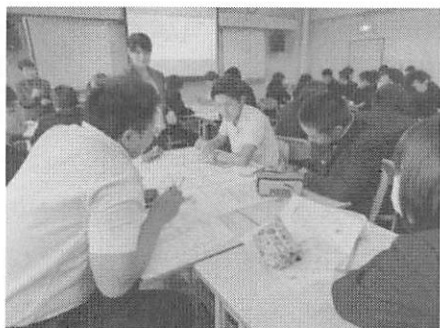
今回の発表は、十勝管内8校の合同研究となった。この8校は、十勝管内高等学校教育研究協議会家庭分科会を3つのブロックに分けたときのひとつである「Cブロック」にあたる学校となっている。

また、題材には「エゾシカ」を選び、地産地消や循環型社会の仕組みなど消費者として何ができるかを考え、自主的に判断できる消費者を育むことを重点目標に取り組んだ。

2 実践内容

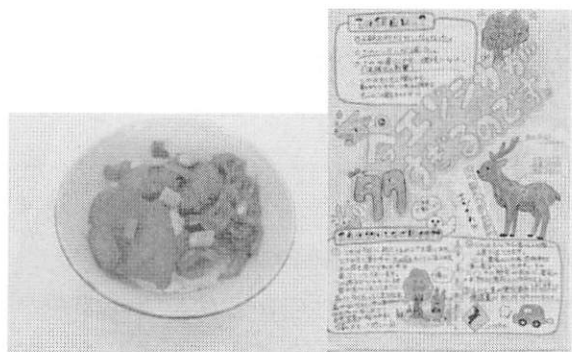
テーマ決定後、8校すべてが消費者教育出前授業を受講した。その事後学習として取り組む内容を各校の実情に合わせて、①レシピ作成 ②調理実習 ③啓発活動の3グループに分け、校内だけのものにせず、学校間で情報の共有をはかりながら学習の深化と発展をめざした。

エゾシカ出前講座では、エゾシカによる被害状況等の説明のあと、「マイナス資源」から肉や皮などを有効活用する「プラス資源」へ転換できることを、ワークショップや肉の試食などを通して考えた。ひとりひとりがグリーンコンシューマーとしての視点に立ち、環境に配慮した消費者になろうと講座はまとめられた。講座修了後のアンケート結果を見ると、「家庭でエゾシカ肉を食べる機会を増やすには、どんな取り組み・工夫が必要ですか」の問いに様々な回答が出され、今回の講座が生徒の興味関心を刺激した結果が見えた。



講座修了後、シカ肉レシピ作成に取り組んだ帯広農業（全）、帯広北、広尾高校では、「短時間で手軽に」「身近な材料で」「高校生らしいメニュー」「肉の臭みを消す工夫」などをポイントに、たくさんのレシピを作り上げた。

これらのレシピを受けて調理を担当した更別農業、帯広農業（定）高校では、よく工夫されているレシピに感動しながら調理・試食をし、その感想と写真などをレシピ担当高校に送った。帯広農業では定時制が作った料理を全日制の生徒にも試食してもらうなどの交流がみられた。



啓発活動担当の帯広緑陽、帯広工業、大樹高校では、レシピ作成や調理実習などの他校の成果を盛り込みながら啓発チラシやポスターを作成した。こうしてできあがったチラシやポスターは、十勝振興局の働きかけもあり市内のスーパーなどに展示された。

帯広緑陽高校では発展学習として、エゾシカを題材としたパネルシアターを作成し保育所を訪問。さらにこの取り組みは釧路市で開催された「エゾシカフェスタ」にて実践発表が行われた。

3 おわりに

地域の課題に焦点を当てた取り組みは、学校間での交流を持つことで、より広い視野を持ち消費者としてどのように貢献できるか深く考えることが出来た。関係機関との連携もあり、地方創生の視点にも発展した取り組みとなった。

提言2 科目『生活と福祉』における少人数指導の 実践について

北海道斜里高等学校教諭 松谷良子

1 はじめに

本校は、昭和16年創立のオホーツク東部地域の伝統校で、平成16年には総合学科に学科転換し、特色ある学校づくりをさらに進めている。

総合学科は「生徒の主体性を重んじ、個性を伸ばす学科」である。普通教科から専門教科にわたり幅広く開設された科目の中から、生徒一人一人の進路希望や興味・関心等によって学ぶ科目を選択することができ、大学・短大・専門学校等への進学から公務員・民間就職に至るまで様々な進路に対応した学習を進めることができる。また、キャリア教育にも力を入れており、「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」では、自己理解や将来の人生設計などについて具体的に学ぶことができる。自分の限らない可能性を追求し、将来の進路実現を目指すことができる学校である。

2 実践内容・評価及び成果について

・授業（座学）

- (1) 外部講師の講義に向けての事前学習
 - 高齢化の現状について
 - 家族や地域社会の現状について
 - 在宅介護と施設介護の違い
 - 高齢者の身体的変化について
 - 介護保険制度や社会福祉制度について

- (2) レクリエーション実習に向けて高齢者との関わり方 基本介護技術 など

・レクリエーション実習

・校内実習での様子及び内容

- (1) 車いすの介助（段差、移乗の仕方、介助の仕方、自走の仕方など）
- (2) バイタルサインの測定（検温、血圧、脈拍の計測の仕方など）
- (3) コミュニケーションの技法
- (4) ボディメカニクス
- (5) ベッドメイキング
- (6) 体位変換（座位、側臥位、端座位など）
- (7) 着脱介助
- (8) 排泄介助（配慮の仕方、おむつ交換など）

成果としては、年間を通して、知識・理解のみならず、思考・判断・表現や技能も向上している。少人数での授業展開ですが、座学、外部講義、外部実習、校内実習と充実した授業展開ができ、進路活動に関しても、毎年、この教科を選択している生徒が、卒業後、町内のグループホームや特別養護老人ホームなど福祉施設に就職し、経験を積み、介護福祉士の資格を取得している卒業生もいる。そして、この授業がきっかけで、福祉関係の進路へ変更した生徒もいる。また、一度町内を出て、更に専門学校などで学んでから、介護福祉士として町内へ戻り、活躍している卒業生もおり、地域と連携して、貢献できていると感じている。

3 おわりに

全体を通して、文章（自分の考え、レポートなど）を書くことが苦手な生徒や、人見知りや引込み思案な生徒もおり、周囲と協力してペアワークなど、大変苦勞している生徒もいたが、1年間を通して、福祉に関わる進路を目指している生徒はもちろんのこと、そうではない別な進路を目指している生徒も、この授業を選択して『良かった』と感じてくれている生徒が多いことが喜ばしいことである。

そして、進路が福祉関係ではなくても、介護や、日常で困っている人の手助けなど、この授業で学んだことを日常生活で役立ててもらえればと実践している事を改めて感じた。知識や技術のみならず、相手のことを思いやる気持ちや心遣い、人とのコミュニケーションなど、精神的な成長ができる授業である。また、社会の変化や地域のニーズに合わせた人材育成としても、貢献できるような授業展開をこれからもできる様に、町の福祉関係の方々にも協力を得ながら、将来を担う未来ある生徒達に向けて、日々努力を惜しまず継続して尽力していきたい。

提言3 農業高校における家庭科教育の充実を目指して ～「生きる力」をはぐくむ 作物の生産から消費までの授業実践～

北海道岩見沢農業高等学校教諭 石井 明日香

1 はじめに

本校は、数ある農業高校の中でも学科数・生徒数が北海道最大の農業高校である。生徒は、自身が生産者の立場となり多くの作物・加工品を学校で生産するための実習を行っている。家庭科は「命の大切さ」や「生きる力」を身につけられる本校の教育活動を大切に、家庭科教育を通じてはぐくむ「生きる力」を育成する授業実践を行っている。

2 授業実践について

「生きる力」を身につけるために、各学年において繋がりのある目標を設定し、3年間の授業を通して目標達成が出来るように実践している。

第1学年では、豊かな食生活を営むための基本的な知識を身に付けることを目標に複数の単元において実習を行っている。その年代に適している食事の特徴を出すためにどのような調理が必要なのかを座学とともに学習している。

第2学年では、年間20回程度の実験・実習を取り入れ、基本的な調理方法を学ばせている。自分たちの生産している食物を食することにより、生産者としても消費者としても自分の考えを持たせたいと考えている。

第3学年では、「豊かな食生活」とは何かを考えさせ、心身ともに健康である生活を営む技術を身につけるための実習を行っている。食事テーマの設定・テーブルコーディネートについても学習し、3年間の集大成として、本校の生産物や加工品を使用して「試食会」を開催している。試食会にて実際にお客様に料理を提供し、プレゼンテーションを行っている。



3 評価について

本校では、ルーブリックを活用した評価方法を各教科で取り入れている。家庭科でも学年・実習内容に合わせてルーブリックによる評価を行っている。授業時のワークシートの自己評価にルーブリックを取り入れることで、毎時の振り返りをしながら明確な自己評価が出来るようになり、さらに技術を向上させたいという学習に対する意識にも変化が表れるようになった。

4 実践の考察

座学と実習の繋がりを持たせ、継続した学習を実践することで、毎日過ごしていても気づかなかったこと、当たり前だと思っていたこと、正しいと思っていたことが違ったなど、家庭科の授業を終えて感じたことも多くあったようで、授業内容の一貫性と明確な目標がある学習活動は、生徒の「気づき」と「理解」を導くことが実践できるのだと考察することが出来た。

5 今後の課題

本校生徒は、長時間の実習よりも短時間で分かりやすく結果が見える授業展開の方が意欲も向上していた。しかし、一つひとつの実習の繋がりや達成目標が「豊かな食生活の実現」繋がっている事への理解を深めることが難しかったが、3年生で「試食会」を経験すると、生産者として、消費者として、それぞれの立場から考えることが出来るようになった。今後は、達成感を感じる1時間の実習のさらなる有効活用法を考えていきたい。また、ルーブリックによる評価は、導入したばかりで評価した後の展開が浅い。生徒自身の自己評価を利用して理解を深め、技術の向上に役立てたいと考えている。農業高校ならではの实習内容を充実させ、生産者としても、消費者としても「豊かな食生活」を作り、自分なりの食育活動を活発に出来る生徒を育てられる授業を展開していきたい。

第 1 分 科 会 報 告

北海道天塩高等学校教諭 片 桐 由 貴

■提言者に対する質疑応答

【補足】シカ肉は全てコープさっぽろベルデ店で下処理された物を購入。部位にもよるが価格は100gあたり500円以上する。食中毒の予防として必ず冷凍している物を購入。実習直前まで冷凍し、包丁まな板も使い分けしている。

【質問】実習費について

【回答】2校で実習を実施。どちらも農業高校で生徒から徴収した実習費でまかなっている。

【質問】各学校にフィードバックしているか

【回答】レシピ作成校にポスターや実習の写真をフィードバックして戻している。

■研究協議

1 グループ6～7人とし、6つのグループで2つの協議の柱について研究協議を行った。

【協議の柱①】持続可能な社会の構築を目指したライフスタイルの確立

地域教育資源の活用事例、活用したい地域資源、グリーンコンシューマーの実践例として、教育資源をどこから手に入れるか。その地域に長く住む方に聞くことや、地域の方に魚のさばき方を学んだり、高大連携の視点で福祉の勉強をしたり、農家と交渉して調理実習の食材を確保したりという意見があった。

【協議の柱②】外部講師の活用方法・学校間で連携する場合のICTの活用について

近隣校と合わせて一緒に実習をする。2カ所の施設で2日間に分けて全員が保育体験を行うといった意見や、これから実施する内容として、ICTの推進事業に取り組んでいる学校や、情報をリアルタイムで共有するテレビ会議のような取り組みを行うという学校からの意見があった。

■助言者からのまとめ

○北海道函館水産高等学校教諭 西田 真沙子

地域の資源を活用して、持続可能な社会の構築を目指した、消費者として望ましい資質を身につけた素晴らしい取り組みである。新学習指導要領に学びの地図を描くとあるが、何ができるようになるか・どのように学ぶかということが今回しっかりと押さえられていた。また外部講師の活用方法として、学校としての要望をしっかりと伝えておくことがとにかく大切で、講師の方をコーディネートしていくべきである。そのためには教材観を自分の中で完全に消化しておく必要がある。

新学習指導要領について、社会に開かれた教育活動をする、学びの地図を描くという話をとおして、少しでも新しいドアを開けてみた方がよい。それが授業改善につながっていく。

○北海道広尾高等学校教頭 後藤 あゆみ

家庭科で消費者教育として捉える視点として、シカ肉が高いのはなぜかということが学習課題になる。食品の流通についても理解できるよい研究である。エゾシカで何を学ぶかではなく、何で学ぶかという視点を持つことが大切である。正解を1つに絞れないような課題、その中から最適な解決方法を考える。今答えが見つからない様々な問題は、次の世代である今の高校生たちが大人になったときに解決しなければならず、それをどう解決していくかを考えさせるのが思考力・判断力・表現力である。またこの研究に携わった先生方は教材について対話し、苦労しながらやりとげ、発表したことは、先生方にとっても学び続ける姿勢であり、アクティブラーニングそのものであった。

第 2 分 科 会 報 告

北海道北見柏陽高等学校教諭 竹 内 篤 子

■研究協議テーマ

授業における社会の変化（特に福祉と高齢社会）に対応する取り組み。

■グループ協議まとめ（4 グループの情報交換）

1 実践例

（1）視聴覚教材を活用する。

例）漫画「ペコロスの母に会いに行く」「ヘルプマン」、映画「明日の記憶」等

（2）新聞記事を比較し、意見交換をする。

（3）レクリエーション、擬似体験の実施。

（4）施設見学をする。

これについては大変な部分もあるが、体験の中に多くの学びがある。

2 外部との連携

（1）ユニバーサルデザイン関連の会社（例 株式会社ワールドワーク…G ホック、G ボタン）などへ講演を依頼する。

（2）地域の施設や講座（例 認知症サポーター養成講座）と連携する。

3 心の養成

（1）「福祉、高齢社会」＝「暗い、大変」と強調しがちだが、「生き生きとすごす」ことが大切である。そのために何が必要かを考えなければならない。

（2）生徒や教員は、高齢者に対する意識の面での学習も必要である。

（3）福祉関係への就職を考える生徒は、資格取得の大変さを意識している。その中で「心」をどのように育てるかが課題である。

■助言者からのまとめ

○北海道札幌厚別高等学校教諭 坂口 真奈美

今回の「生活と福祉」の生徒に関わる課題のとらえ方などは、学校経営目標・方針に沿ったものである。今後、我々が学習内容を組む時の糸口となるものである。

また、事前準備の重要性を感じた。この春からの事前準備があることで生徒のやる気を引き出す展開となっている素晴らしいものである。

○北海道留辺蘂高等学校教頭 佐野 陽子

この取り組みは、以下の点などから効果的な学習内容であるといえる。

①高齢者の生活に関心を持ち、かかわりを持っている。

②介護に関する基礎的な知識と技術を現場で働く職員に直接ご指導いただいている。

③人の気持ちを考えて行動することが普段の生活にも生かされている点で、道德教育の充実につながっている。

科目内容として、各ライフステージを健康に過ごすことが健康寿命をのばし、高齢者の生活の質の向上につながるという視点も大切である。

教育課程の編成については、教育課程を構造的に捉え、教科を越えた横断的な取り組みが必要である。どの科目のどの分野とリンクさせるか、と考えることで「いつ」「何単位で」ということが見えてくる。

これからも、社会の変化に対応しながら地域と連携して家庭科教育を進めていただきたい。

第 3 分 科 会 報 告

北海道穂別高等学校教諭 石 井 京 子

■ 提言者より補足説明

学科ごとに目指す目標や学力が違うため、学科にあわせて授業を構築している。生徒が達成感を感じられるような実習内容にし、達成感が自信につながるような働きかけをしている。

■ 提言に対する質疑応答

【質問】各科の生産物や加工品を使用しているが、各科教員との連携や実習費はどうしているのか。

【回答】家庭科としては年間計画を立てているが、自然が相手なので直前にならないとわからないため、足りないものは市販品を購入している。規格外等を各科から頂いている。

【質問】ループリック評価について

【回答】SSHの指定を受けてから導入した。目標を生徒に明確に提示することで、実習で係が固定されがちであるため、意欲喚起につなげる目的で導入した。適正な自己評価ができていられるかも評価することを説明すると、生徒の自己評価がしっかりできていると感じた。

■ 研究協議テーマ

① 座学と実習を組み合わせた授業実践

② 1時間の調理実習の工夫

③ 1年間の授業のまとめ方

2つのグループにわけ、この3つのテーマについて情報交換を行った。

■ 研究協議のまとめ

① 実習を先に行い座学で知識を深める、座学を先に行い実習で知識を確認する、座学と実習を平行して行うを、単元や生徒の能力などに合わせて使い分けている。

② 1時間で数品の実習は難しいので、1時間に1品×3回の実習を行い、合わせると献立が出来上がるようにする。各班で作るものを変え、合わせると献立になるなどの工夫がされている。事前準備を教員側で行い、1時間

で調理・試食・片付けを終えられるようにしている。

③ 4月の最初の授業で、自分の誕生した時間や天気など保護者と対話する課題を出し、すべての授業で人生を考えることにつなげる。試食会などを行い学習のまとめとする。ライフプラン作成や人生すごろくをまとめとする。家庭科で学んだことを活用し、人生をよりよく生きて欲しいとメッセージを伝える。

■ 助言者からのまとめ

○北海道千歳北陽高等学校教諭 古御堂 敦子

本当にわかるとは何かを、佐伯 胖さんの本「真にわかる」を紹介し説明。

教員として、座学でわかったことを「真にわかる」ところまで生徒に学習させるための創意工夫が必要。アクティブラーニングを取り入れ、生徒の認知プロセスを開花させることが必要。「量的研究」だけではなく、「質的研究」で生徒が発した言葉に学びを深め、達成感・充足感まで導くことが重要。

○北海道江別高等学校教頭 宮崎 円

次期学習指導要領（社会に開かれた教育課程の理念の下、将来を展望し新しい時代を切り開くために必要な資質・能力を育むための豊かな学びを実現していく）をもとに、生徒たちが「何ができるようになるのか」を考え、生徒たちに具体的に学ぶ方法を考えていく必要がある。評価が、生徒が自らの学びを振り返り、次の学びにつなげていくものになっているか、教師が「何を教えるか」ではなく、生徒に「何ができるようになるか」という視点が重要。育てたい生徒像を明確化するため、教科だけではなく、学校全体として考えるカリキュラム・マネジメントがとても重要である。

講 評

北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班

主査 佐 紺 撰 子

今年の提言はどれも多くの学校の参考となる大変意欲的なものでした。

帯広工業高校の堺 香理先生、更別農業高校の田中裕子先生、帯広緑陽高校の皆川亜希子先生、大樹高校の森 志美江先生のご提言は、エゾシカという北海道特有のテーマに組織的に取り組んだ実践でした。

十勝管内の家庭科の先生方が、長年に渡り連携して自主的に研修に取り組まれてきた基盤があったからこそ成立した研究です。

この実践において、生徒の中に課題を発見しその解決に取り組むというPDCAサイクルが生まれたとありましたが、まさに「主体的・対話的で深い学び」の実現が図られていたと思います。それは、エゾシカ肉について消費の意味や背景をしっかりと生徒に伝えたからではないでしょうか。エゾシカについては、消費者教育、環境に配慮したライフスタイル、食育、食文化、地方創生とさまざまな観点から学習することができる発展性のある題材です。価格面、入手の仕方も含め、今後ともぜひ研究を継続していただきたいと思います。

今後は、教員だけでなく生徒も各学校での取組の成果や課題をブロックや管内全体で共有する方法を検討し、実現していただきたいと思います。

また、地域との関連に加えて、校内の他教科との連携、例えば、環境の保全、自然の生態系との関わりなど、エゾシカを巡る状況などは、理科の先生とのTTで行っていくとさらに充実したものになることが期待できます。

評価についても、学校のウェブページ等で情報提供いただくと、多くの先生方に広がると思います。本研究協議会の研究の観点にも「～と評価の工夫と改善」等とあることから、提言の際は評価についても資料とともに盛り込んでいただくと、他校の参考になります。

斜里高校の松谷良子先生のご提言は、「生活と福祉」におけるさまざまな取組についてで

した。資料の10ページには、この取組が高齢者への関わり方について、高齢者のみならず、障がいのある方との関わり、友人や先生との学校生活、家族との生活などあらゆる日常生活に活かせるとありますが、正にそのとおりであると思います。

今後の課題は、少人数での学びを生かしつつ、地域の力を借りて、生徒が生涯にわたって主体的に学んでいく力を身に付けさせることにあります。また、評価についても是非今後とも検討を進めていただきたいと思います。

岩見沢農業高校の石井 明日香先生のご提言は、農業高校における家庭科教育の役割について取り組まれた内容でした。SSHの指定を受け、ループリックによる評価によって、生徒の学習意欲を高めたことが本実践の成果であると考えます。ループリックを示すことで、生徒は何をどこまでやることが求められているかを理解し、学習に取り組む目標になります。したがって、ループリックの表現が、生徒にとって、求められていることが分かりやすいものであるか、絶えず見直していく必要があります。加えて、このループリックを活用することで、担当教員が変わっても同じ評価ができるようにしていくことも期待されます。

課題は、「フードデザイン」の年間指導計画に食育を明記することです。現行の学習指導要領では、我が国の食を取り巻く環境の変化や食生活の多様化、国民の健康増進の重要性から、食育基本法が制定され、食育の推進が図られていることに対応して、従前の「フードデザイン」の内容に食育の意義と食育推進活動を加えるなどの内容の改善を図っています。

最後に、細やかな心配りで本研究協議会を成功に導いてくださいました事務局校・運営研究員の教職員の皆様をはじめ関係各位に厚く御礼を申し上げ、講評といたします。

グループ別体験研修講座報告

A 食育セミナー

1 主な内容

- ① デモンストレーション2品
- ② 「元気な食卓の合言葉で…文字遊び～

ま・ご・は・や・さ・し・い 会席～」

健康な生活に役立つ、和の食材についての講話

2 参加人数 19名

3 講師

光園学園調理製菓専門学校

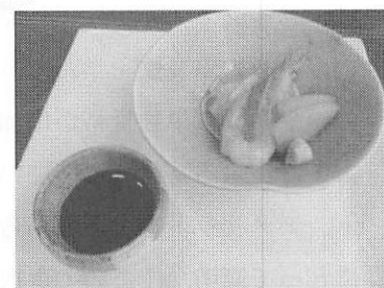
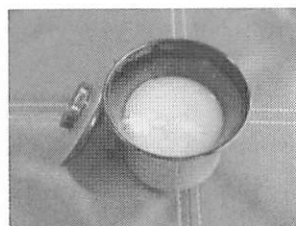
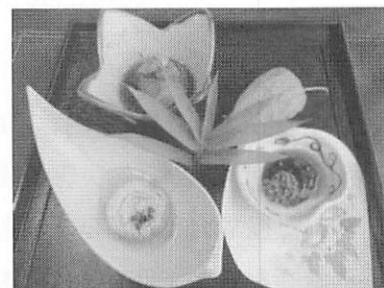
日本料理講師 田 安 透 様

4 会 場 光園学園調理製菓専門学校

【研修内容・成果】

講義の中では、「まごはやさしい」の食事法に基づいて2品目のデモンストレーションが行われました。1品目は、『とうもろこしのすり流し 胡麻豆腐・ポップコーン・黒胡椒』とうもろこしを美味しく調理するには、皮のまま茹でることで甘みが増します。また、だしの取り方についても改めて教えて頂きました。2品目は、『きのこころろ飯 光園オリジナルベーコンと十勝マッシュルーム』和と洋がミックスしたご飯物で新しい美味しさを感じました。

「まごはやさしい」とは、食品研究家で医学博士の吉村裕之先生が提唱されているバランスの良い食事の覚え方です。健康やダイエット・体の若さを保つために実践されている食事方法であり、毎日の食事の中で不足しがちな栄養素を補うことができます。特に和食は、ビタミン・食物繊維・カルシウム・鉄分などをバランスよく組み合わせられた料理が多い食事法であり、和食の奥深さを実感することができました。



【講座担当者】

札幌工業高等学校	秋田 貴子
札幌南陵高等学校	高橋 理緒
函館大学附属柏稜高等学校	佐藤 美穂子
函館大学附属有斗高等学校	若狭谷 美緒
富良野緑峰高等学校	佐藤 有紀
三笠高等学校	佐々木 淑子
三笠高等学校	斎田 雄司

B 住生活セミナー

1 主な内容

① 講義：「住まいと防災の基礎知識」

② グループワーク：「DIG の実践」

2 参加人数 13名

3 講師

北方建築総合研究所 地域研究部 地域シス
テムグループ研究主任 馬場 麻衣 様

4 会場 北海道立道民活動センター

「かでる2.7」540会議室

【研修内容・成果】

近年、大きな自然災害が続き、防災教育を取り入れた授業実践の必要性が高まっている。そのため講師を招き、北国における住教育と防災について講義を拝聴した。また、DIGを取り入れたグループワークの実践についてご指導いただいた。

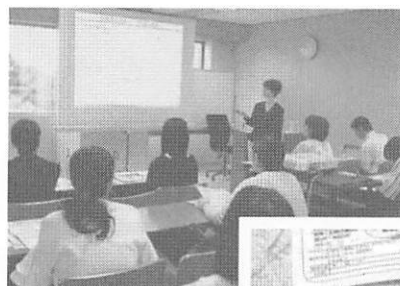
講義では、安全な生活を営み続けるために、欠かせない住まいについての役割を確認するとともに、ライフステージによって住まいが変化するという視点の重要性を学んだ。日本はこれから人口の減少と共に単独世帯が増加し、住宅選びの考え方が変化する時代となっている。住まいのメリット、デメリットを考えながら、生涯を見通し自らにとって適切な住まいの選択眼を養う授業が大切となってくる。

次に、防災の基礎的知識の定着を図り、災害への備えを十分に考える指導が重要性を再確認した。特に北国では冬場特有の被害がある。災害時に雪害で救助活動の遅延等が考えられるなどの冬の備えについても生徒に考えさせていくことで、迅速で適切な行動につなげる力を育むことができるとご指導いただいた。

グループワークでは、「DIG の実践」を行い、具体的な指導項目や注意点を確認することが出来た。DIG (Disaster Imagination Game) は大き

な地図を囲み、災害時の避難や対策をイメージトレーニングする体験的学習手法である。DIGには、「災害を知る」「まちを知る」「人を知る」特徴がある。それを活用し授業に取り入れることで、地域の防災力が理解できる、防災ネットワークの形成を図ることができる、災害救援活動のイメージができる、地域への理解が深まる、といった効果が期待されることがわかった。

講義、グループワークともに実践的な内容で、授業改善につながる大変充実した研修となった。



【講座担当者】

札幌西高等学校	伊藤 友美
札幌南高等学校	高橋 あき
釧路北陽高等学校	佐藤 奈央子
高等豊学校	佐藤 慈雨
三笠高等学校	水野 未歩

C 保育セミナー

1 主な内容

① 講義

「家庭科技術検定保育4級・3級の指導方法」

② 体験

「造形表現（折り紙）4級」

2 参加人数 43名

3 講師

全国高等学校家庭科教育振興会事務局主幹

永原 邦代 様

新潟県立新潟高等学校教諭

小川 浩子 様

佐賀女子短大付属佐賀女子高等学校教諭

山本 昌子 様

北海道当別高等学校教諭

今多 靖子 様

4 会場 北海道立道民活動センター

「かでる2.7」730会議室

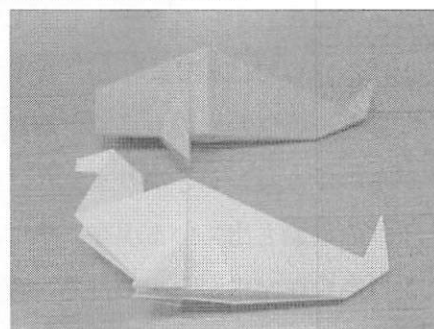
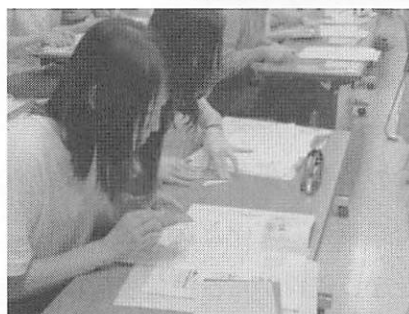
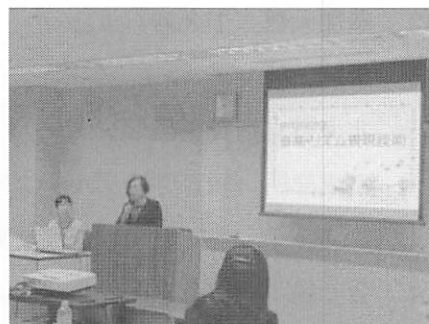
【研修内容・成果】

はじめに、家庭科技術検定保育分野の歴史について説明があり、家庭科技術検定一元化にむけた変更事項の確認が行われた。続いて、音楽・リズム表現技術、造形表現技術、家庭看護技術、言語表現技術のそれぞれについて、4級・3級受験の指導方法の注意点について解説をいただいた。

音楽・リズム表現、造形表現、言語表現では、歌詞やメロディー、題材、紙芝居等から読み取れる情景を思い浮かべて表現することの大切さ、家庭看護では自己流の扱いではなく、基本を守って課題の子どもの月齢に合った声かけや扱いをすることの大切さを教えていただいた。

後半は、造形表現技術4級の実技問題の規定課

題に挑戦し、四苦八苦しながらも折り紙に取り組んだ。今後の授業の指導にも役立つものとなり、とても充実した研修となった。



【講座担当者】

留 辺 薬 高 等 学 校	佐 野 陽 子
江 別 高 等 学 校	宮 崎 円
余 市 紅 志 高 等 学 校	千 葉 和 代
帯 広 農 業 高 等 学 校	鳥 井 晶 子
文教大学明清高等学校	上 原 さゆり
札幌厚別高等学校	坂 口 真奈美
当 別 高 等 学 校	今 多 靖 子
天 塩 高 等 学 校	片 桐 由 貴
美 唄 尚 栄 高 等 学 校	風 上 沙 織
名 寄 産 業 高 等 学 校	榊 原 しほじ
利 尻 高 等 学 校	成 田 佳 織

D 消費生活セミナー

1 主な内容

- ① 講義：「最近の若者の消費行動と消費生活相談から」

2 参加人数 18名

3 講師

北海道立消費生活センター

事業部門 教育啓発グループ主幹

道高 真理 様

4 会 場：北海道立消費生活センター

2階 小会議室

【研修内容・成果】

「最近の若者の消費行動と消費生活相談から」というテーマで講義をしていただきました。

まずは消費者庁の資料から、消費生活に関わるクイズに挑戦からスタートしました。授業で取り上げる内容ではありますが、少し捻った選択肢になると一瞬悩むものも多く、解説していただきながらのチャレンジとなりました。成年年齢の引き下げの議論も出ている現在、早ければ来年度入学生は高校在学中から契約行為の責任を負う状況が出てくる可能性があるため、一層の消費生活に関わる内容を取り扱うことの大切さを再認識することができました。

若者の消費者トラブルの実態や全体的な消費行動の変化、特にインターネットを利用したデジタルコンテンツのトラブルが多い傾向であるなど、道立消費生活センターに寄せられた内容や消費者庁のまとめたものをもとに現状を教えてくださいました。

その後、2グループに分かれ、消費生活センター内の見学をさせていただいた。商品テストの実験器具や商品添加物などの展示スペースを見せていただき、説明を受けました。



【講座担当者】

札幌東高等学校	田中晴美
江別高等学校	鈴木朋美
北見柏陽高等学校	竹内篤子
札幌新川高等学校	柿澤小百合

北海道高等学校長協会家庭部会 調査研究委員会報告

調 査 研 究 委 員 長

(北海道登別青嶺高等学校長) 井 上 明 子

1 調査研究のテーマ

学習指導に関する調査研究

～生活課題を解決する力や主体的に社会と関わり参画しようとする態度を育成する家庭科教育の在り方～

2 平成29年度調査研究委員： ◎委員長

◎井上 明子(登別青嶺) 佐々木淑子(三笠)
小路 修司(千歳北陽) 田村 俊行(当別)
藤井 一志(釧路明輝) 林 正憲(野幌)
杉田 良二(名寄産業) 武田 久(倶知安)
二木 浩志(帯広農業) 花田 祐治(置戸)
福西 一成(美唄尚栄) 鈴木 譲二(江陵)
池田 延己(函館大妻)

3 調査研究の目的

子どもたちが主体的に、対話的に、深く学んでいくことにより、学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し、未来を切り拓くために必要な資質・能力を身に付けたり、生涯にわたって能動的に学び続けたりできる、家庭科教育の推進を目指す。また、こうした学びの質に着目して、家庭科教員の資質・能力の一層の向上や授業改善の取組を活性化していくことを目指す。

4 調査研究の経緯及び今後の視点

将来の変化を予測することが困難な時代において、次期学習指導要領の改訂を踏まえ、課題の発見・解決に向けた主体的・対話的で深い学び(いわゆるアクティブ・ラーニング)による授業改善が推進されている。

本調査研究委員会においては、平成27年度から平成28年度までの2年間、問題解決能力、

意思決定能力を育成する指導の充実に焦点を当てて取り組み、2年間の調査研究において、学校家庭クラブ活動及びホームプロジェクトの実践状況等の実態を把握し、その調査結果を踏まえた問題解決学習の取組の基礎となる指導資料集を作成した。

今後は、その指導資料の活用や還元の在り方などに加え、「社会に開かれた教育課程」の理念の下、さらに調査研究内容の視点を広げ、教科横断的な取組や地域資源等を活用した取り組みなど、問題解決型学習の在り方について調査研究を深めていくこととした。

5 調査研究の方針

家庭科教員の資質の向上や授業改善に資するという観点で、家庭科教育における指導内容・指導方法の工夫・改善について調査研究し、指導案等、具体的な指導事例、指導資料として提言する。

- (1) 家庭科の校長、教頭、指導主事等によるワーキンググループを編成して、研究・検討作業を進める。
- (2) 事例収集や調査等には、各地区の家庭科研究会等を活用して組織的に行う。

6 調査研究の内容

問題解決型学習の調査研究

- (1) 「ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動」に係る単元指導計画・指導案等の継続的な提供
- (2) 指導資料集の活用状況やアクティブラーニング等に係る調査研究
- (3) 教科横断的な取組や地域資源等を活用した取組に係る単元指導計画・指導案等の提供

7 調査研究のスケジュール（平成29年4月から平成31年3月までの2年間）

(1) 調査研究内容の検討・決定

平成29年4月～5月

(2) 指導資料集の活用状況やアクティブ・ラーニング等に係る調査研究内容の検討

平成29年5月～10月

(3) 研究調査活動の実施

平成29年11月～12月

(4) 研究調査の分析・まとめ

平成29年11月～平成30年1月

(5) 研究調査結果を踏まえた課題の明確化

平成30年2月～平成30年3月

(6) 課題解決方策の具体的内容検討

平成30年4月～7月

(7) 具体的方策を踏まえた研究調査活動

平成30年8月～10月

(8) 調査研究のまとめ

平成30年11月～平成31年2月

8 調査研究内容

(1) アンケート調査の概要及び集計結果概要

ア アンケート調査の標題

「家庭科教育の在り方及び実施状況」に関するアンケート

イ アンケート調査の対象

北海道における全高等学校及び中等教育学校（課程別・大学科別）

対象数：353

ウ アンケート実施日

平成29年11月17日～11月28日

エ 回収結果

回答数：270（公立246、私立24）

回収率：76.5%

オ アンケート調査の項目及び結果概要

(ア) 各校における家庭科科目履修状況について

- ① 共通教科 家庭基礎(2単位)63.7%、家庭総合(4単位)33.7%、生活デザイン(4単位)1.1%

- ② 専門教科 フードデザイン(41.6%)、子どもの発達と保育(17%)、生活と福祉(8.5%)、服飾手芸・食文化（ともに7.4%）

(イ) 校長協会家庭部会から平成29年3月に発刊された「問題解決能力・意思決定能力の育成を目指した指導資料」の各校における活用状況について

- ① 資料集を知っている はい52.6%

- ② ①のうち活用している（一部活用も含め）16.7%、今後活用予定23.3%

(ウ) 各校における「主体的・対話的で深い学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）」を意識した授業の実施状況について

実施している 89.3%

(エ) 各校における「主体的・対話的で深い学び」を行うことで生徒に身に付けさせたい力等について

- ① 身に付けさせたい力 学習した内容を実際の生活で生かす力81.1%、他者と協働する力78.1%

- ② 身に付く力 他者と協働する力77.8%、他者と意見を共有して互いの考えを深める力73.7%

(オ) 各校における「主体的・対話的で深い学び」の授業での実施形態について

実験、実習等の協働的取組84.4%、グループによる話し合い81.9%

(カ) 各校における「主体的・対話的で深い学び」を家庭科の授業で実施する場合の困難さ等を感じる形態について

保育所や高齢者施設等の訪問による実践的取組55.9%、地域社会での実践やボランティア 53.3%

(キ) 効果的な学習の実践例（記述式）

(2) 今後に向けて

アンケート調査結果を踏まえ平成30年総会等において分析や方策も含め詳細（具体的実践事例も）を報告する予定

(3) 謝辞 ご協力をいただいた校長先生方をはじめ関係各位に心より感謝を申し上げます。

Ⅱ 平成29年度北海道高等学校家庭クラブ連盟活動報告

平成29年度北海道家庭クラブ連盟の活動について

北海道家庭クラブ連盟成人会長

(北海道当別高等学校長) 田 村 俊 行

平成29年度北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動報告にあたり、日頃より本連盟の諸活動にご支援、ご協力をいただいていることに心より感謝申し上げます。全国的に加盟校の減少という課題を抱えながらも、本道の家庭クラブ連盟の活動の質は高く、全国大会において確実な成果を残しているのも皆様のご支援のたまものと考えています。

さて、本年度の第65回全国家庭クラブ研究発表大会は8月3日、4日、長崎県長崎市で開催され、「平和を祈る長崎で 鳴らそう未来へ

希望の鐘を」をスローガンに全国から多くの高校生が参加し、長崎県内の高校生の多彩なおもてなしにより、全国の家庭クラブ員が交流を深めることができました。



長崎は、古くから海外との交流が盛んで異国情緒溢れる多彩な文化に彩られるとともに、被爆地として平和への強い願いを胸に復興の道を歩んできましたとの、大会生徒委員長の挨拶により、参加者全員が歴史の深さと平和の尊さを改めて心に刻みました。参加者全員にとって、本大会への参加は素晴らしい経験となったことに違いありません。

本道の代表として、ホームプロジェクトの部では江別高校の河野美友さんが、学校家庭クラブの部では倶知安高校の皆さんがそれぞれ堂々と発表し、高い評価を得ました。特に江別高校の河野さんの発表は、その後、全国高等学校長協会家庭部会からの推薦を受け、全国産業教育フェア秋田大会において発表する機会をいただきました。

10月5日、6日に、平成29年度北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会が、平成30年度の東京での全国大会の予選を兼ねて江別市民会館において江別高校の当番校で、開催されました。ホームプロジェクトの部では、札幌北高校の清水菜緒さん、学校家庭クラブ活動の部では名寄産業高校がそれぞれ最優秀賞を受賞し、来年の東京大会に参加します。両校のクラブ員には東京大会での健闘を大いに期待しています。



家庭クラブ活動はまさに、今求められている「主体的・対話的な深い学び」の実践の積み重ねです。今後も、家庭クラブ活動をさらに全道的な活動として充実・発展させていくことが必要となります。今後とも家庭クラブの活動への積極的なご協力をお願いいたします。

第58回全国高等学校家庭クラブ連盟 指導者養成講座に参加して

北海道札幌丘珠高等学校教諭 佐藤 弘子

第58回全国高等学校家庭クラブ指導者養成講座が、7月27日～28日に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されました。北海道からは、北海道札幌丘珠高等学校2年澤口瑠衣と藤田美夢、私の3名が参加しました。

講座は、クラブ員と顧問とで別々のプログラムになっており、顧問分科会のテーマは「より充実した学校家庭クラブ活動を目指して」でした。1日目の分科会では、「私の学校家庭クラブ活動の工夫」について実践報告交流会を行いました。各学校のいいところを探し、応援メッセージを書いて交換しましたが、これからの活動の励みとなりました。クラブ員と一緒に受講した体験講座では、「心を結ぶ『和の紐結び』」をテーマに、飾り結びの「菊結び」と「総角結び」を教えていただきました。結びの由来や歴史的背景なども説明していただき、大変勉強になりました。また、紐結びを通して時代を超えて受け継がれた人の心を知り、心のご縁も結びたいというメッセージをいただきました。その後の顧問研修は、「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の更なる充実を目指して」と題した、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官市毛祐子氏による講義でした。ホームプロジェクトを充実させるには、年間指導計画を見直し、生徒が生活の中から課題を発見できるよう取り組ませる時期を検討することや、課題意識を持たせるような授業展開を工夫することが大切である、また、学校家庭クラブ活動を充実させるには、継続的で組織的な取り組みとなっているか、活動は可視化されているかなど、これまでの取り組みを振り返り検証していくこ

とが大切であると教えていただきました。生徒が家庭科で学んだことをもっと深く研究してみたいと思うような、魅力的な授業展開の工夫が大切であることを再確認することができました。

2日目の、栃木県立足利南高等学校の森紀子先生による実践活動報告は、「足利銘仙PRプロジェクト～ホームプロジェクトから学校家庭クラブ活動へ～」と題し、地域と密着した学校家庭クラブ活動についての報告でした。ホームプロジェクトでの取り組みが発端となり、家庭クラブとして足利銘仙を広く知っていただく活動が始まりました。小物作りを通しての小学校や老人福祉センターとの交流から、市のイベントに参加するなど活動が広がっていき、生徒たちは自主的自発的に活動するようになり、自信や誇りを持つようになったそうです。生徒の成長する姿が見られる大変充実した活動内容でした。その後の分科会では、専任一人でも無理なく取り組める活動、校外で広げられるネットワーク、自分の学校でも取り組みたい活動など、交流の成果をワークシートや模造紙にまとめ、顧問全体会で発表し合いました。先生方の熱意が伝わり、大きな力をいただきました。最後のクラブ員報告では、「日本（ここ）でも世界（そこ）でも、みんながつながる学校家庭クラブ活動」をテーマにクラブ員が取り組んだ成果を発表し、その生き生きとした姿に頼もしさを感じました。

この研修で得たことを今後の家庭クラブ活動に生かしていきたいと思います。貴重な機会を与えていただいたことに深く感謝いたします。

第65回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会 北海道代表出場校として ホームプロジェクトの部

北海道江別高等学校教諭 高坂瑠美

平成29年8月3日(木)～4日(金)に、長崎県で行われた標記大会へ参加して参りました。平和祈念像のある平和公園に近い長崎ブリックホールを会場に、全国からおよそ250校の参加のもと開催されました。

本校からホームプロジェクトの部で大会出場することは私自身にとっても初めてのことでしたが、生徒は堂々と気負うことなく発表に臨みました。

研究発表は、本校生活デザイン科3年河野美友さんとサポートメンバーの同じく石垣悠緒さん、2年東海林詩乃さん、八重樫花音さんの計4名で出場し、「もし家にいるときに災害がおきたら～自分の命を守るために～」の研究テーマで発表を行いました。

この取り組みは1年家庭総合の学習の中で行ったもので、まずは自宅の防災対策と地域の防災について調べたものでした。そこからさまざまな疑問点や、自分自身の課題がどんどんわき出てきてそれを自ら解決していく、というまさにホームプロジェクト活動そのものでした。

生徒から次々にわき出てくる発想は、教員側からは想像できないようなことばかりで、一緒に活動しながらも学ぶことの多い研究でした。その中でも、現在の居住地である江別市役所に赴き、疑問点をぶつける姿や、旭川に離れて暮らしている実家の防災対策まで行っ

たこと、製作した防災グッズを入れる防災パーカーや身元確認カードなど、災害の備えとしてこれから誰もが活用できるものがたくさん生み出されました。

今回の大会までの道のりを振り返ると、授業で始まったホームプロジェクトがさらに深みを増していったことが分かります。そしてこれはどこで発表しても恥ずかしくないくらいものになりました。生徒も約2年間にわたって活動してきた取り組みで、高校生活＝ホームプロジェクトといっても過言ではないほど、この活動に向かってきた日々でした。この経験こそが今後の彼女の進路や将来にわたってきっと生きてくるものと確信しています。

今回、江別市役所をはじめ、札幌市民防災センターなど多くの方にご協力いただき支えてもらいながらすすめることができました。このような機会を与えていただいたことに感謝申し上げ報告とさせていただきます。ありがとうございました。



【参加メンバー】

第65回全国高等学校家庭クラブ研究大会 北海道代表出場校として 学校家庭クラブ活動の部

北海道倶知安高等学校教諭 近 藤 麻理子

平成29年8月5・6日に長崎県長崎市長崎ブリックホールにて「平和を祈る長崎で 鳴らそう未来へ希望の鐘を」のスローガンのもと、第65回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会が開催されました。本校家庭クラブは、学校家庭クラブ活動の部北海道代表として生徒4名と参加してきました。

本校の研究発表は、「KUKKOU INTERNATIONALIZATION PROJECT～地域をグローバルにPR」という題目で行いました。私たちが住む倶知安・ニセコ地区は雪質が良いことが世界的に知られており、毎年多くの外国人観光客がやってきます。しかし人気が過熱する一方で、海外資本によって土地や建物が買収され、それに伴い日本らしさや倶知安、ニセコ地区特有の魅力が減っているという現状を知りました。このような現状を受け、私たちは他ではできない独自の町おこしの方法はないかと考え、立ち上げたのが今回のプロジェクトです。地球規模の視点で物事を考え、地域視点で行動するグローバルの考えを元に、倶知安町の特徴である外国人世帯や観光客の多さや本校の特色である英語教育に力を入れている点を生かし、世界共通の「食」を通じてこの地域の良さをPRすることを進めてきました。研究を進めるにあたり後志振興局をはじめ、町の飲食店に赴き情報を収集したり、アドバイスを頂いたり多くの方々に協力していただきました。また、スキー場などを訪れている外国人観光客にアンケートを実施することで、外部の人々と話すことが苦手な本校の生徒達がこのプロジェクトを通して成長していく姿を見るこ

とことができました。また、町の広報誌や北海道新聞に私たちの活動が取り上げられ、地域を活性化していく一助となれたのではないかと思います。

約1年かけて多くの人々に支えながら活動してきた結果、全道大会で最優秀賞を頂くことができました。全国大会出場が決まってからも毎日研究や練習に励み、本番でも立派に発表することができました。残念ながら結果は上位入賞には至りませんでしたが、「他校を含めた地域全体と連携していくという、今後の目標が大いに期待できる」との評価をいただきました。



全国大会では他校のレベルの高い発表を目の当たりにし、生徒だけでなく私自身多くのことを学ぶことができ、大変貴重な経験をすることができました。今後の教育活動に大いに生かしていきたいと考えています。

第66回北海道高等学校家庭クラブ連盟 研究大会・総会を終えて

北海道江別高等学校教諭 高坂 瑠美

平成29年10月5日（木）～6日（金）の2日間、江別市民会館を会場に、加盟14校のうち11校が出席、顧問・生徒合計86名のみなさまに参加いただき標記大会が行われました。

今年度は各支部から学校家庭クラブ活動の部で4校、ホームプロジェクトの部で4校の研究発表と、指導者養成講座へ参加した札幌丘珠高校による報告、生徒研修ではトランスパレントペーパーという色つきの薄手の紙を折り重ね、そこにできる幾何学模様を透かして楽しむ「トランスパレントスター」を製作をしました。

北海道高等学校家庭クラブ連盟への加盟校は決して多くありませんが、年に一度、このように顔を合わせられる機会は生徒にとってはもちろん、顧問にとっても大変貴重であり、1校にほぼ1人しか配置されていない家庭科教員のネットワークを作るためにも、参加校がもっと増え、教員間のつながりがひろがっていくことを願っています。

さて、研究発表ではホームプロジェクトの部で北海道札幌北高等学校2年清水菜緒さんによる「YELL～家族で切り拓け！健康への道～」、学校家庭クラブ活動の部では北海道名寄産業高等学校家庭クラブによる「さをりでつむぐ地域の絆～つながる心、笑顔とともに～」が最優秀賞を受賞し、来年度東京都で開催される全国高等学校家庭クラブ連盟研究大会へ北海道代表として出場することとなりました。

今年度担当校として運営を行いました、会場の窮屈さや寒さなど、ご不便をおかけし

た点もありました。そのような環境でも、生徒が主体的に動き、短い時間でしたが交流を図ることができた有意義な大会になったのではないかと考えております。改めてみなさまに感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。

【結果報告】

ホームプロジェクトの部

最優秀賞	札幌北高校 2年 清水菜緒 YELL～家族で切り拓け！健康への道～
優秀賞	札幌丘珠高校 2年 澤口瑠衣 家族でだし健！～だしで健康生活～
企画賞	江別高校 2年 東海林詩乃 家族みんなが健康で仲良くすごすために～父の生活習慣の改善について～
実践賞	当別高校 3年 郡凜 嫌いな食べ物をチェンジ！ ～いっしょに学ぼう食べ物の大切さ～

学校家庭クラブ活動の部

最優秀賞	名寄産業高校 家庭クラブ さをりでつむぐ地域の絆 ～つながる心、笑顔とともに～
優秀賞	倶知安高校 家庭クラブ KUKKOU INTERNATIONALIZATION PROJECT2 ～地域を GLOCAL に PR～
協力賞	旭川永嶺高校 家庭クラブ ユニバーサルなクッキング ～「食物アレルギー」あっても安心な洋菓子作り～
努力賞	名寄高校 家庭クラブ Meiko improving Life Project[MiLP] ～お弁当による栄養サポート～

Ⅲ 平成29年度北海道家庭科技術検定委員会 活動報告

家庭科技術検定の実施について

北海道高等学校家庭科技術検定委員長

(北海道名寄産業高等学校長) 杉 田 良 二

日ごろから、専門委員の先生方のご尽力や各校のご理解とご協力に、心より感謝を申し上げます。

さて、本道では今年度から平成32年度実施の全国に先がけて、被服製作、食物調理、保育を一元化して試行的にスタートしました。

今年度の全道の受検者数につきましては、それぞれ別表のとおりです。被服製作・食物調理検定につきましては、昨年度に比べ2校60名の減少、25年度からはおよそ500名もの大幅な減少となりました。一方、保育技術検定につきましては、12校より合計1,147名が受検しました。

検定への取り組みは、求められる学力向上への一つの重要な推進力と確信しております。今後とも、本技術検定の益々の充実と発展に向け、皆様方の尚一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

1 事業報告

(1) 専門委員

役 職	学 校 名	氏 名
全国・北海道(和服)	函館大妻	西 本 千 春
全国・北海道(洋服)	江 別	高 坂 瑠 美
全国・北海道(食物)	名寄産業	中 森 真 也
全国・北海道(保育)	函館大妻	工 藤 真 知 子
全国・北海道(保育)	当 別	澤 谷 郁 恵
北 海 道(被服)	美唄尚栄	駒 谷 綾 子
北 海 道(食物)	恵 庭 北	荒 木 恵 理
北 海 道(食物)	三 笠	斎 田 雄 司
北 海 道(保育)	当 別	今 多 靖 子

(2) 諸会議・講座等

- ①常任委員研究協議会 H29. 4. 20
- ②第1回専門委員研究協議会 H29. 4. 20
- ③第2回専門委員研究協議会 H29. 8. 8
- ④平成29年度家庭科技術検定評価研究協議会検定委員養成講座 H29. 8. 9

2 被服製作・食物調理検定受検者数の推移

	種 目	H29	H28	H27	H26	H25
4級	被服	365	158	250	315	392
	食物	957	1,132	1,157	1,106	1,156
3級	被服	146	126	128	154	211
	食物	576	673	749	786	728
2級	和服	37	58	58	76	71
	洋服	32	57	54	50	49
	食物	265	249	296	305	294
1級	和服	62	56	50	51	53
	洋服	49	44	42	45	51
	食物	209	205	224	173	168
合 計		2,698	2,753	3,008	3,061	3,173

3 保育検定受検者数(12校 合計1,147名)

音楽・リズム表現				造形表現技術			
4級	3級	2級	1級	4級	3級	2級	1級
109	33	33	30	284	85	42	26
言語表現技術				家庭看護技術			
4級	3級	2級	1級	4級	3級	2級	1級
127	50	34	29	165	37	34	29

平成29年度全国高等学校家庭科技術検定 全国専門委員会に参加して（食物）

北海道名寄産業高等学校教諭 中 森 真 也

今年度の全国専門委員会は、5月11日（木）・12日（金）の2日間東京都私学会館アルカディア市ヶ谷を会場に行われました。北海道からは函館大妻高校から西本千春教諭・工藤真知子教諭、江別高校から高坂瑠美教諭、当別高校から澤谷郁恵教諭とともに参加しました。

1. 全体会

全体会では、昨年度の家家庭科技術検定受検者数や三冠王取得者数、関係書類等の報告、保育技術検定との一元化についての説明がありました。一元化に伴い、運営事務の流れにおける変更点の説明があり、一元化に向けた試行用ガイドラインの確認がなされました。

2. 分科会

被服製作分科会、食物調理分科会、保育分科会に分かれて研究協議が行われました。

食物調理分科会においては、平成28年度委員会報告として作問委員会、研究評価委員会よりそれぞれ報告、今年度の出題意図等の説明がされました。技術検定試験実施についての部分では、関係書類集と合わせて実施における注意事項や各級における確認事項がポイントを絞って説明されました。また、各級の実技試験問題、評価基準における平成28年度からの変更点が確認されました。1級について、使用が可能になる食品・調理器具、評価基準の見直し、食事摂取基準の改定に伴い献立作成における摂取量のめやすの変更点等が確認されました。その中で、熊本大会以降の質問事項に対する回答がなされ、活発な意見交換がなされました。調理時間の短縮などを目的に熱源や使用材料について

の質問・意見が出されましたが、現状実施されている形の中で工夫をするということが各級における調理技術を推し量ることとし、現状での実施を継続することが確認されました。その後、東京栄養食料専門学校教育部実験実習課課長沢辺利男様から、包丁の扱い方として実演を含めた講演をいただきました。指定調理における指導のポイントや包丁の握り方、動かし方等基礎からの指導において大変参考になる講演でした。講演後には、全国から参加された先生方がグループに分かれ実技試験の指導方法や評価について、審査講習会の実施内容などについて情報交換を行い大変貴重な時間となりました。

3. 指導・講評

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 市毛祐子様より家庭科技術検定の更なる活性化を目指してと題し講評をいただきました。学習指導要領改訂という動きの中で、生徒が主体的・対話的で深い学びを実現するという目標に向け先生もアクティブラーナーという視点に立ち、教員の指導力向上、生徒への指導方法の工夫、外部への情報発信の中心に家庭科技術検定を置き更なる活性化を目指して欲しいというご指導をいただきました。

4. おわりに

今回参加をさせていただき、全国から集まった先生方に大変刺激を受けました。私自身も今後の北海道家庭科技術検定の普及、充実に貢献できるよう生徒とともに励んでいきたいと思えます。

平成29年度全国高等学校家庭科技術検定 全国専門委員会に参加して（被服）

函館大妻高等学校教諭 西 本 千 春

平成29年度家庭科技術検定全国専門委員会が、5月11日（木）・12日（金）の2日間にわたり、東京千代田区にあるアルカディア市ヶ谷（私学会館）において開催されました。

全国の専門委員の家庭科教員が一堂に会する中で、北海道からは5名が参加し、分科会では被服（2名）、食物（1名）、保育（2名）に分かれ、技術検定の評価の方法や運営の在り方について意見交換・研究協議が行われました。

1. 全体会

始めに、全国専門委員会は、技術検定の万全かつ適正な運営の在り方や評価について理解を深めることを目的として開催されています。これまでは、家庭科技術検定と保育技術検定の全国専門委員会が別日程で実施されていましたが、今年度から同時開催となりました。

委員会では平成28年度技術検定の受験状況や関係書類等の説明、家庭科技術検定の一元化について報告がありました。また、被服、食物調理、保育それぞれの検定において、歴史は異なれど「検定内容の質の確保」「評価の透明性・公平性」の継続が確認され、かつ、それぞれの技術力に加え、生徒に身につけさせたい力としてチャレンジ力、思考力、想像力、段取り力、豊かな人間性などの共通認識の確認もなされました。文部科学省初等中等教育局の市毛祐子教科調査官からは、新学習指導要領の改訂のポイントが詳解され、これまでの指導の蓄積を基盤とし、家庭科として子どもたちに何を教えるかだけでなく、どのような力を育むのかという視点から、指導方法の工夫・改善をしていくことが大切であることが示されました。これから、家庭科技術検定はますます重要になってくるのに伴い、検定が知識や技術の習得にとどまらず、忍耐力、コミュニケーション能力を身に付けさ

せ、学ぶこと自体が楽しく、更に上級に挑戦したいといった学習意欲の向上につながる重要な役割を果たしていかなければならないと改めて気付くことができました。

2. 分科会

全体会に続き、被服製作、食物調理、保育の分科会に分かれて討議が行われました。私の参加した被服製作の分科会では、平成28年度委員会報告、平成29年度検定及び30年度以降の検定について作問委員会・研究評価委員会から報告・説明がありました。また、専門委員の評価の目を養うために6～7名ずつのグループに分かれ、1級から3級までの5作品に対し、それぞれの作品評価の検討会を行うことができました。そして、研究評価委員の評価と比べながら、勉強させていただいた中で、一つひとつその基準を確認できたことは、評価する上での観点が広くなり、これからの指導への刺激となりました。

3. おわりに

技術検定について、毎回思うことは全国各地から集まる先生方が熱心に指導なさっていることです。検定受験者は年々減少傾向にあり、生徒の技術不足により、教員の思いも寄らない作品が出てきている現状で、指導が大変になってきているのは事実です。しかし、生徒一人ひとりが到達目標に向かって努力し、その結果として合格につながったときの喜びや達成感は、何ものにもかえられないものです。今回の全国専門委員会同時開催により、さらに各検定への理解を深め、一元化に向けて意義ある機会となったことで、私自身も共通認識の下、微力ながら今後の検定実施に向けて取り組んでいきたいと思っています。

IV 家庭科教育に関する報告

平成29年度第55回北海道高等学校教育研究大会

教科別集会家庭部会を終えて

北海道札幌清田高等学校教諭 清 野 祥 子

平成30年1月11日(木)、札幌エルプラザ4階大研修室において道内各地から67名の参加を得て、研究主題「生涯を見通して生活を創造する力を育む家庭科教育」のもとに開催した。

1 総会

平成28年度事業報告・決算報告・会計監査報告、平成29年度事業計画・予算案が承認された。平成30年度研究主題については、役員会・運営委員会に一任された。規約の改正が承認され、第6条(1)部会長の部分が改正された。

2 講演

演題：「食育で健康に生きる～食べ方で将来が決まる？その特徴とは～」

講師：ヌキタ・ロフィスド代表

フードディレクター 貫田 桂一 様

健康に生きる食べ方とは、良い食品を選ぶ、よく噛みしめる、おいしく食べることである。食べ方の特徴には、血液型の起源が関係している。「食育」とは、食卓で教育することである。健康で人生を楽しむには、地域のおいしいものを食べる、いい水、いい塩を使用することが大事である。食に関わる仕事をしている家庭科教員から発信することが大切である。そして、子どもの特性に合わせて上手にほめることから始まる。

3 研究協議

(1)研究発表

主題：「地域のつながり」を「学びの広がりへ」～学校・地域が連携して進める食育実践～

発表：北海道札幌南高等学校教諭 高橋 あき
前任校の平取高校は1間口の小規模校で、農業を基幹産業とした地域を結び付けた学び

は考えられないかと思案し、部活動と教科で連携した活動を実施している。部活動「トマトクラブ」の実践では、農協との連携を行い、特産品のトマトを活用した新レシピ開発・試食会を実施した。教科「フードデザイン」では、食育と食育推進活動として、考案した給食メニュー実施日に小・中・保育園を訪問し、プレゼンテーションを実施し、その後レポート作成を行い、学びを深めていった実践を発表していただいた。

(2)情報交換

実践内容や、工夫されている点、疑問点などを協議、情報交換が活発に行われた。

(3)助言：北海道教育庁後志教育局教育支援課 高等学校教育指導班主査 佐紺 摂子 様

研究発表では、地域の教育資源を有効に活用し生徒の学びを広げていた。「家庭科だからこそのことは何か」という教師の熱意が込められた実践であったと評していただき、今後の家庭科教育の充実に向け、小中高の学習内容の系統化、変容をみとる評価方法、学習内容の可視化について一層の強化が求められると講評いただいた。

4 研究紀要

遠隔授業システムを用いた家庭科の授業展開

執筆：北海道名寄高等学校教諭 荒 嘉律

地域キャンパス校・センター校で出張授業の補完的役割を果たす「遠隔授業システムを用いた授業展開」について「家庭科の授業」の視点から教育効果や課題、展望について執筆していただいた。

平成29年度北海道産業教育フェア 「さんフェア2017」を終えて

北海道江別高等学校教諭 高坂 瑠美

平成29年9月30日(土)、新さっぽろサンピアザ光の広場を会場に「さんフェア2017」が開催されました。これは特色ある教育活動の成果と魅力を広く道民に発表するために3年に一度開催されているものです。

今回は「北の大地を担う！繋がれ～心with 産業～」をキャッチフレーズに、農業、工業、商業、水産、看護、総合学科、そして家庭部会の合わせて7部会、55校からの参加となりました。

基本方針を「人々との交流を深める」、「生徒の生きる力を育む」として、「展示・演説・販売」、「意見・体験発表会」、「作品・研究発表」の3つの内容で行われています。

家庭部会では、展示・演説・販売部門において江別高校生活デザイン科、当別高校家政科、名寄産業高校生活文化科、三笠高校食物調理科、置戸高校福祉科、江陵高校福祉科、の計6校が参加し、家庭部会ブースを盛り上げました。

当日は多くのお客様に来場していただき、当別高校生徒による絵本の読み聞かせには小さな子どももたくさん集まっていました。名寄産業高校による布の絵本やおもちゃの展示、くるみボタンのプレゼント、三笠高校によるシュガークラフトの展示、製菓部による焼き菓子とケーキの販売は大盛況で早々に売り切れるほどでした。また江別高校3年生が課題研究で取り組んだMD作品の展示、麻糸で織ったコースターの販売など家庭に関する学科

の普段の取り組みをおおいにアピールできました。また置戸高校、江陵高校はパネル展示で活動の紹介を行いました。

運営として参加した生徒からは、「様々な年齢層の方に来場していただき、いろいろなことを知ってもらうことができた。また入学を考えている中学生も来ていて説明できたことがうれしかった。」という声が聞かれました。

家庭に関する学科をアピールすることは各校それぞれでは地域で行われていることと思われませんが、このように一堂に会しアピールできたことで、より多くの方に家庭に関する学科で学ぶことを直接見てもらうことができ、さらに高校生にとっても貴重な機会であると思いました。

運営にあたっては事前の会議や準備、当日は朝早くから準備作業などにご協力いただきスムーズに進められました。あらためてみなさまに感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。



【光の広場の様子】



【展示(三笠高校)】



【絵本の読み聞かせ(当別高校)】

北海道高等学校長協会家庭部会 意見・体験発表大会を開催して

事務局 北海道江別高等学校教諭 上 野 博 美

(1)大会を運営して

今年度で5回目を迎えた家庭部会意見・体験発表大会は、『全道の高等学校で家庭・福祉を学んでいる生徒が、日頃の学習で学んだことの成果について、意見や体験を発表するとともに、生徒相互の交流をとおして、「生きる力」を育み、家庭・福祉教育の充実を図る』ことを目的として実施しています。

8月25日、北海道江別高等学校を会場に、9校9名の参加で行われました。普通教科「家庭」から発展した「選択科目」「家庭クラブ」の体験や学び、専門学科ならではの体験など、多様化した社会の中で、豊かな心をもって生き生きと活動している姿を見ることができました。今後も、主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる家庭・福祉教育の「生きる力」を感じる大会にしたいと思います。

昨年度の反省としてあげられた学校行事との調整を行い、今回初参加の学校もありました。参加校数は昨年と同じでしたが、さらに周知し多くの高校が参加しやすい大会にしていきたいと思っています。新学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」を実現するためにもこの大会を是非活用ください。特に普通科の生徒にとっては活動を外部で発表する機会が少なく、この大会が役立つものと考えています。

来年度もこの趣旨を踏まえ、より多くの生徒が参加できますようご理解・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。参加いただいた各高校の生徒の皆さん、ご指導いただいた先生方に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

(2)大会参加者

- ①江陵高校 廣田 瑞希 『変化を楽しんで』
- ②剣淵高校 里 悠斗
『「二人の思い」あずかりました』
- ③三笠高校 鈴木 保乃佳
『新しいことに会うこと』
- ④江別高校 佐藤 希美
『夢に向かって今やるべきこと』
- ⑤千歳北陽高校 荒川 二千歌
『創造しよう「家族のかたち」』
- ⑥名寄産業高校 佐々木 裕貴
『笑顔咲く、心つながる介護の輪』
- ⑦置戸高校 山崎 綺乃
『ほんのちょっとの勇気』
- ⑧夕張高校 二階堂 ののか
『チャレンジ・モア・スピリット』
- ⑨当別高校 岡元 綾乃 『保育士になる夢は』

(3)大会結果

- 最優秀賞 夕張高校 二階堂 ののか
- 優秀賞(産振推薦) 三笠高校 鈴木 保乃佳
- 優秀賞(産振推薦) 置戸高校 山崎 綺乃

※産振推薦：家庭部会代表として平成29年度
産業教育意見・体験発表大会に参加しました。



意見・体験発表大会に参加して

『Challenge More Spirit』

発表者 北海道夕張高等学校 3年 二階堂 ののか
指導者 北海道夕張高等学校教諭 中 尾 綾

(1) 発表内容 (要旨)

私のふるさと夕張は全国で唯一、財政破綻をした地方自治体です。人口減少に伴う学校の統合、公共料金の値上げなど「全国で最高の負担、最低の行政サービス」と言われました。メディアによるネガティブな報道に、いつしか私は『財政破綻はもういいよ』と思うようになっていました。

そんな状況が変わり始めたのが昨年です。市は新たなまちづくりを目指し「再出発、挑戦あるのみ」を伝えるコンセプト映像をつくりました。私はその撮影にスタッフとして参加し、それを機に『高校生が夕張のためにできることは何だろう』と考えるようになりました。

そんな中、家庭科の授業で、バス待ちスポットという施設の内部空間を、市と協同で考えることになったのです。私たちは、交流の場としてカラオケを設置したらどうか。子どものために「うさぎ」を飼おう……とアイデアを出し合い、結果を市職員へプレゼンしたのです。ところが市職員から『カラオケを置いても皆が楽しめるとは限らない』とか『うさぎの糞の始末は誰がするの?』という指摘があり、一瞬、場が凍り付きました。

しかし、改めて振り返ると、利用する側の視点だけで考えていたことに気がきました。私たちは公共の場に生きていながら、公共の場の意味さえ気付かず、与えられたものは当然そこにあるものとして生きているのではないのでしょうか。私たちには、公共サービスを受ける権利があると同時に、果たすべき義務や守るべきルール・モラルもあるのです。

そこで私たちは、意見を検討しなおし再修正す

るかたちで市に最終提案しました。また、市民向けの利用マナーの呼びかけや近隣の商業施設への協力依頼文も作成しました。

こうした私たちの取組を市は評価してくださり、若年者向け住宅の間取りやデザインを高校生と協同で行うことも始めています。

この高校生の考えを地域社会に反映させるという新たな挑戦は、私に「地域の一員」という意識を芽生えさせてくれました。私たちが行政や政治に対して関心を持ち、声をあげることの重要性を理解し、自分たちが高校生としてできることは何かを本気で考え始めたのです。

その後私たちは今年の学校祭のスタイルを大きく変更し、全校でよさこいを披露することでかつて市にあったよさこいを復活させました。

夕張市が「再出発、挑戦あるのみ」をスローガンに立ち上がろうとする今、高校生も直接地域にかかわり、さらに夕張市の希望となる一步を踏み出すことができたのです。

私たちはここに誓います。チャレンジ・モア・スピリットで未来に立ち向かうことを。

(2) 市との連携授業を振り返って

生徒たちは、今回の取組で地域貢献を果たし、やりがいや生きがいを感じることができました。今後も、家庭科としてはそれにとどまらず、主体的行動に繋げ自立した生き方に結びつけていくことが大切だと感じております。 (中尾 綾)



北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して (家庭科に関する学科代表)

発表者 北海道三笠高等学校3年 鈴木 保乃佳
指導者 北海道三笠高等学校教諭 斎田 雄司

(1) 生徒を指導して

夢の実現のために、多くのことに興味関心を抱き、継続的な努力がどれだけ大切であるかを、生徒に改めて気付かされました。

(2) 生徒原稿「新しいことに会うこと」

人々を新しい発想で驚かせ、そして楽しませるお菓子。私には、そんなお菓子との出会いを提供するパティシエになる、という夢があります。

私は製菓部に入部し、自分の視野の狭さを思い知りました。実習室では、物事を考えたり判断したりする範囲の意味での「視野」を広く持たなければいけません。そのために私は、部活動や授業で実習室に立つとき、こまめに実習室をぐるりと一周見回すことを心掛けました。人の動きや時計、調理台の状態を把握する。そう意識することによって、やるべきことに気づくことが増えていきました。私は、意識を少し変えるだけで視野は広がり、見える世界がガラリと変わるのだということを知りました。

その後も、もっと視野を広げなければならないと思う場面が何度もありました。初めてのお菓子コンテストに参加する時。当時の私は、知識と経験が少ないために分からないことだらけで、全くいいお菓子のイメージが浮かびませんでした。そこで私は、製菓に関することも、その他のことも、できるだけ多くのことに興味を持って生活しようと思いました。レシピを見たり、休みの日にはお菓子屋さんに出かけたりして、色々なお菓子に触れること。ニュースを見て、世の中の動きを知ること。どんなことにも挑戦してみること…。そんな生活を続けていく中で、私はたくさんの驚きと感動に出会い、自分の知ら

なかった世界に触れることが、こんなにもわくわくすることなのだと知ることができました。

私は、自分がそこでやるべきことや、新しい発見をすることが何よりも楽しみとなりました。そうすることで、自分の見える世界がどんどん広がっていき、その発見は確実に私の力となりました。そして自分も、今まで私にそうさせてきたように、人に驚きと感動を与えるパティシエになりたい。大好きなお菓子を、時代と共に進化させていくことに挑戦したい、と思うようになりました。

多くの物や情報があふれた今の世の中でこの夢を叶えるためには、物事を様々な角度から見る力が必要です。誰も考えたことのない、誰も作ったことのないものを見つけ出す力です。視野を広げることは、その力を培うのに役立つと思います。多くの知識や経験があることで発想が豊かになり、何か問題が起こった時はそれを解決する手掛かりになります。

だから私は、これからも視野を広げ続けます。視野の広さはその人の世界そのもので、自分次第でもっと大きく広げることができると思います。また、何事も継続する、ということも大切にしたいです。努力し続けること。学び続けること。現状に満足せず、変わり続けること。いつまでも成長することを止めないで前を向いていきます。

人々を新しい発想で驚かせ、そして楽しませるお菓子。私はそんなお菓子に出会ったことが何度もあります。そしてそれは、とてもわくわくすることでした。そのわくわくを、今度は私が、これから出会う多くの大切なお客様にお届けします。

北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して (福祉科に関する学科代表)

発表者 北海道置戸高等学校 2年 山崎 綺乃
指導者 北海道置戸高等学校教諭 佐藤 由香里

(1) 生徒を指導して

介護実習での出会いや経験を振り返り、学んだことを皆様の前で発表することは生徒にとって大きな挑戦だったと思います。勇気を出してチャレンジしたことで、優秀賞をいただくことができ、それが大きな喜びと自信につながりました。

(2) 生徒原稿『ほんのちょっとの勇気』

人見知りでコミュニケーションが苦手な私ですが、将来は人の役に立ちたいという夢を抱き、置戸高校に入学しました。福祉という分野に憧れ、新しい自分を一から作り、誰とでも笑顔で交わる人になるつもりでしたが、厳しい毎日でした。

そんな私の転機は1月末の5日間の介護実習です。

認知症の方と関わったことがなく、実習初日は戸惑ってしまうことばかりでした。特に少しの沈黙でも、何かを話さなければと言う考えが頭から離れません。利用者様と会話をして少しでも距離を近づけられたら、とそんな思いでいたのに、何度も会話を試みるもうまく伝わりません。

そんな時、職員の方からの「しゃべり続けなくても隣にいただけでも、利用者様は落ちつくよ」という言葉にはっとしました。利用者様とお話するだけがコミュニケーションではなく、利用者様に寄り添うことが必要なのだと感じました。

介護実習4日目。私はなかなかお話をすることが難しい重度の認知症のG様と休み休み会話をしていました。「G様、手を握らせていただいてもよろしいですか。」疲れが出てきたようなので気休めにでもなればという気持ちでした。

すると、G様からの返答は「汚いよ。」

私はとっさに手を握っていました。G様は私の目を見ながらほほえみかけてくださり、手のぬくもりが伝わってきました。

少し経ち、G様は「いいかい。」とおっしゃり、私ははっとして手を引こうとしました。しかし、G様は私の両手を覆うようにそっと手を添えてくれました。言葉も出さず私とG様は手を握りあって、顔を見合わせているだけでしたが、ただただ感動した瞬間でした。ほんの少しかもしれませんが、G様の心に寄り添えた気がして、少しでもG様の役に立つことができたのかもしれないと思うと言葉になりませんでした。

心の中で思っていることを誰かに口に出してみることはほんのちょっとの勇気がいります。でも、勇気を出して、伝えることで、涙がこぼれそうなほどの感動が得られたのです。

重度の認知症だと言われるG様ですが、認知症だから、話かけてもわからないのではなく、ほんのちょっと勇気を持って声を掛けてみることで、このような大きな感動を与えてくれました。障害がたとえ重くても人と人とのつながりを持つことができるのだとわかりました。

高校に入学してからのこの1年で、私はずいぶん変わりました。自分からたくさん人に話しかけて、良く笑うようになりました。苦手なことや目の前にある課題から逃げずにコツコツ努力することができるようにもなりました。きっと今の自分があるのも、私だけの力ではなく、関わってくれた全ての人達のおかげです。

利用者様の命を預かる。そして、生活を支えていく。そんな介護福祉士になるために、思いやりとほんのちょっとの勇気を持って、将来出会う利用者様のために私は前に進んでいきます。

平成29年度初任者段階教員研修 1年次研修(高等学校)「一般研修」に参加して

北海道小樽水産高等学校教諭 福 地 成 海

1 期日 平成29年12月26日(火)

2 参加人数 171名 (家庭科4名)

3 会場 北海道第二水産ビル

4 研究内容

(1) 講義・協議・演習

「生徒指導力・進路指導力」

「ホームルーム経営力」

講師：北海道立教育研究所 研究・相談部

鈴木 肇 研究研修主事

内容：①生徒指導の基本

②キャリア教育

③学年・ホームルーム経営

④学習・生活規律

⑤ホームルーム担任業務の在り方

(2) 講義・協議

「チーム貢献力」「地域との連携・対応力」

講師：北海道立教育研究所 研究・相談部

佐々木 真一 主査

内容：①組織の一員としての素質能力

②教職員の身分や服務

③学校評価

④保護者との連携

⑤地域住民との連携

(3) 講義・協議・演習「教科等指導力①」

「家庭科教育の現状と課題」

講師：後志教育局 高等学校教育指導班

佐紺 摂子 主査

内容：①家庭科教育の現状と課題

②国や本道の施策等

③課題の交流

④自己課題の明確化

(4) 説明・協議「教科等指導力②」

『「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」
の実際』

講師：北海道江別高等学校

高坂 瑠美 教諭

内容：①「ホームプロジェクトと学校家庭クラ
ブ活動」の取組

(5) 説明・演習「教科等指導力③」

「授業改善」

講師：後志教育局 高等学校教育指導班

佐紺 摂子 主査

内容：①学校評価（観点別学習状況の評価）の
意義

②目標と指導と評価の一体化を図る指導
の在り方

③学習評価を踏まえた授業改善

④「指導と評価の計画」の作成（演習）

(6) 研修のまとめ

内容：①研修の振り返り

5 おわりに

全体会、教科別部会においてたくさんの先生
方にご指導いただきましたことを感謝いたしま
す。

特に、教科別部会で日々の悩みを初任者同士
で共有し、協議できたことは自己の課題を明確
にし、具体的な解決策を得るまたとない機会と
なりました。

今回の研修で学んだことと、学び続ける姿勢
を忘れずに日々精進して参ります。今後もし
指導のほどよろしくお願いいたします。

平成 29 年度北海道高等学校産業教育実技講座に参加して

北海道栗山高等学校教諭 山 田 真規子

本講座は8月7日～10日の4日間、北翔大学短期大学部こども学科において開催されました。

<第1日目>

講義「専門教科家庭の現状と課題」

後志教育局教育支援課高等学校教育指導班

主査 佐紺 摂子 様

スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール指定校での実践例、多様な進路希望にこたえるための北海道における施策についてご講義いただきました。また主体的・対話的な深い学びの視点を取り入れた学習・指導の改善充実、ICTの活用等の教材の充実についてご説明いただきました。

演習「保育の基礎理解」

演習「子どもの健康と安全」

北翔大学短期大学部 講師 菜原 桂子 様

保育の意義、家庭の教育力の低下や運動能力、コミュニケーション能力の不足について改めて学ぶことができました。応急手当の実習では、従来の処置から日々変化しており、適切な情報を得て学んでいくことが必要であると感じました。

<第2日目>

演習「手作りおもちゃの作成」

演習「赤ちゃん人形を用いた援助実習」

北翔大学短期大学部 講師 小林 美花 様

乳児から楽しめるペープサート作りを行いました。参加者それぞれに表情の異なる動物たちが完成し、子どもの関心を惹きつけ、かかわりを楽しむことを学びました。午後からは赤ちゃん人形を用いて乳児の援助方法・留意点についてご指導いただきました。高等学校家庭科では

特に乳児とのかかわりについて重視されており、実際の授業での指導方法について考えることができました。

<第3日目>

演習「パネルシアターの作成」

演習「子どもの音楽リズムの基礎」

北翔大学短期大学部 講師 菜原 桂子 様

「自己紹介」をテーマにパネルシアターを作成し、発表を行いました。必要な材料から作成の手順、発表の留意点までご指導いただき、授業の中で実践するために必要な知識を学びました。音楽リズムの実習では、リトミックについてのご講義の後、ピアノ伴奏に合わせながら体を動かし、実際に体験することができました。またペットボトルを活用した手作り楽器の製作、手話を取り入れた合唱などの活動も行いました。

<第4日目>

演習「身近な素材を用いた表現遊び」

北翔大学短期大学部准教授 清水 桂子 様

演習「子どもの食育について」

北翔大学短期大学部 講師 菜原 桂子 様

布や新聞紙など身近な素材が創造性を高める玩具として活用できることを学びました。食育については重要なテーマであり、楽しみながら食への関心を高める活動例をご紹介いただきました。

<まとめ>

保育分野の専門性を高めることのできる大変充実した研修となるとともに、参加者7名での活動や情報交換も貴重な体験となりました。

最後になりましたが、本講座の開催にご尽力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

平成29年度 産業・情報技術等指導者養成研修を受講して

北海道当別高等学校教諭 足 達 しずか

〈期日〉 平成29年8月7日（月）

～8月10日（木）

〈研修場所および研修内容〉

8月7日 全国高等学校長協会家庭部会事務局

・講義「家庭科における授業改善の視点」

文部科学省初等中等教育局教育課程教科
調査官 市毛 祐子様

各学校での取り組み、情報交換を行った。

・講義「地域と共に歩む家庭科教育」

前長野県屋代南高等学校 宮入 千恵子様

地域と共に歩む学校であるために広い視野
と発想の転換の重要性を再認識した。

・講義「デザイン思考を取り入れた指導の工」

兵庫県立西脇高等学校主幹教諭 藤原 容子様
地域との関わりからHPやSPへと参考になる
実践事例だった。

・講義・演習「住居分野における指導の工夫」

学芸大学名誉教授 小澤 紀美子様

地域環境に配慮した大人と子どもの協同的
な学びの必要性を感じる事例だった。

8月8日 杉野服飾大学

・講義「昨今のファッションビジネスの動向」

杉野服飾大学講師 早乙女 由紀子様

・講義・演習「アパレル新素材の紹介」

「渡辺雪三郎オートクチュール」展

杉野服飾大学教授 鈴木 美和子様

・講義・演習「色彩に関する演習」

杉野服飾大学准教授 桐山 征士様

・講義・演習「ファッションとプロダクトデザ
イン」 杉野服飾大学 肉丸 美香子様

アパレル産業の現況、最新機械を使用した
製作実習など大変役立った。

8月9日 東京誠心調理師専門学校

・講義「現代の食生活の課題やトレンド、フー
ドビジネス等について」

東京誠心調理師専門学校講師 竹森 美佐子様

・実習「おいしさの科学と調理」

・講義・演習「盛りつけのテクニックとテーブ
ルコーディネート」

東京誠心調理師専門学校講師 藤田 真弘様

・講義・演習「盛りつけの実践」「施設見学」

東京誠心調理師専門学校講師 河嶋 宏朗様

水と味付けの関係、食器から献立、栄養バラ
ンスを考えるなど食に関する視点が広がった。

8月10日

全国高等学校長協会家庭部会事務局

・講義・演習「保育の指導法の工夫～保育技術
検定を取り入れて」 栃木県立宇都宮中央女子高
等学校教諭 飯田 みゆき様

学習目標が明確であり、相互評価も可能なた
め効果的な学習方法の一つと再認識した。

・講義「消費生活市民を育む消費者教育の実践
について」 消費教育支援センター総括主任研究
員 柿野 成美様

積極的な消費者市民教育、グローバルな視
点を持つことの意義を生徒へ周知したいと感
じた。

・講義「家庭科における授業改善の視点」

文部科学省初等中等教育局教育課程教科

調査官 市毛 祐子様

新学習指導要領改訂の方向性と今後の家庭科
の目指す役割を再認識した。

〈まとめ〉

最新の情報に触れ、日々研修に努めなければ
と実感した。このような機会を与えてくださっ
た関係者の皆様に感謝申し上げます。

V 福祉教育等に関する報告

第17回「福祉に関する教科・科目設置校 研究協議会」を終えて

函館大妻高等学校長 池田 延己

標記研究協議会は9月21日(金)、全道から
公私立13校、32名の参加で開催された。

(1) 基調報告

報告者 江陵高等学校長 鈴木譲二先生
全国福祉校長会理事会・総会・研究協議会に
ついて、①北海道の担当が調査統計部になった
こと、②平成30年度「生徒体験発表作文」の
事務局提出が4月20日までとなっていること、
③「介護福祉士等に係わる講習」の継続実施要
望書について、④文部科学省矢幅視学官から、
平成31年度から新カリキュラムなること、な
どの報告がなされた。

(2) 基調講演 『インクルージョン』

北海道視覚障害者福祉連合会長

島 信一郎 様

インクルージョンが目指している社会は、遠
い存在だった障害を持っている人たちなどを、
身近に自分のことのように感じ、お互いに助け
合っていくことができる社会である。そのため
の一環としてユニバーサル上映映画祭を実施し
ている。音声ガイドのナレーションを入れたり、
日本語の字幕スーパーを入れたりしており、会
場に足を運んで貰い、ユニバーサル環境を知っ

て貰うことで、人に対しての優しい気持ちを持
ち、それが日常生活にも広がっていくことを目
指している。

(3) 介護技術講習会『口腔ケアの実技実演』

函館歯科衛生士専門学校 渡邊恵里先生
三浦伸子先生

口腔ケアの基本的な姿勢や粘膜ケアについて
説明があり、実技と実演が行われた。口腔内の
残渣を作り出すために、市販の食品を代用が可
能と言うことから、生活支援技術に取り入れる
ことができる内容であった。

(4) 授業見学 『医療的ケア実技試験』

函館大妻高校福祉科3年

気管カニューレ内部の痰の吸引実技試験を見
学した。

(5) 研修 『カラーセラピー』

ラブリーカラース 干場亜希子様

福祉現場でも色について注目されている。高
齢者にとって見にくい色、リラックスできる色
などについて、カラーセラピー理論に基づいて
お話しいただいた。

(6) 研究協議

研究協議①では平成29年度全国福祉校長会
学科主任代表者会議の報告、研究協議②では各
種情報交換が行われた。



第2回北海道地区高校生介護技術コンテストの開催について

江陵高等学校教諭 反保 遥

(1) コンテストを開催するにあたって

平成28年度に第1回北海道地区高校生介護技術コンテストが開催され、今年度2回目を迎えた北海道地区高校生介護技術コンテスト。今年度より、各校から選出された教員により、実行委員会を立ち上げ、課題や審査項目について協議し、平成29年8月25日（金）に北翔大学においてコンテストを迎える運びとなりました。今年度は昨年度よりも介助内容を盛り込み、排泄介助、移乗介助、食事介助といった課題内容で行われました。また、昨年度に引き続き、多くの後援・協賛金を賜りましたことに心からお礼申し上げます。(2) 出場校

北海道置戸高等学校／北海道剣淵高等学校
北海道留寿都高等学校／函館大妻高等学校
江陵高等学校

(3) 実施方法

競技内容	課題に対する介護技術を競う
競技時間	介護技術7分、アピール2分
出場資格	北海道地区の高等学校で福祉を学ぶ生徒 (同一校の選手2名、控え選手1名) 控え選手はアピールすることにする

(4) 課題について

雪国 花子さん(83歳・女性)は、脳梗塞の後遺症による右片麻痺があります。介助があれば立位はとれますが、歩くことはできません。トイレ介助の自立を目標に、介護老人保健施設に入所して1か月になります。最近、思うように話すことが出来なく、気分が沈みがちで、生活への意欲が低下しています。現在、昼食が終わり、車いすのまま居室でテレビを

見ています。午後のおやつ時間の前に排泄(排尿)を促してください(後始末は自分でできます)。そして、排泄が終了後、トイレから車いすへ移乗し、食堂へお連れしてください。その後、水分補給を促してください。

(モデルは、ジャージの上からパジャマを着用しています。着脱するのはパジャマだけです。)

(5) 審査項目について

【介護】

コミュニケーション、プライバシーへの配慮、個人の尊厳、自己決定の尊重、自立へ向けた支援、安全・安楽への配慮、個人因子に基づいた支援、介護者同士の連携、時間

【アピール】

創意工夫など(審査員裁量)

(6) 結果について

賞	チーム名	生徒氏名
最優秀賞	北海道剣淵高等学校	深川 愛海 星 沙紀 佐藤 創一郎
優 秀 賞	函館大妻高等学校	竹原 桃香 野口 優花 山城 楓花
奨 励 賞	江陵高等学校	浦島 実由 小林 史佳 奥山 優妃



第6回全国高校生介護技術コンテスト秋田大会に参加して

北海道剣淵高等学校教諭 柏 倉 早智子
北海道剣淵高等学校3年 星 沙 紀
深 川 愛 海
佐 藤 創一郎

この介護技術コンテストの全国大会は、毎年全国産業教育フェアで、福祉部の催しとして開催されています。今年は10月22日（日）の第27回全国産業教育秋田大会で行われました。工業部ではロボット競技大会、商業部からはキッズビジネススタウン、農業部ではフラワーアレンジメントコンテスト、特別支援学校部は高校生カフェなどを運営しており、複数の会場にたくさんの高校生が集まっていました。

全国高校生介護技術コンテストには、全国の地区大会を勝ち進んだ10校に加え、特別枠として、昨年優勝地区から一校、当番地区から一校が加わった全12校で競いました。

出題は、1か月前に「事前課題」として、対象者の状況（健康状態、身体機能、活動内容、利用者理解に必要な様々な職歴や趣味などの個人因子、生育環境や家族の希望などの環境因子）や、使用できる物品（ベッドや車椅子の機種や品番）会場図など、介護に必要な情報が公開されます。参加生徒は、その事前課題に基づき、どのような技術課題が出題されるか想像し、あらゆる介護を練習し、当日を迎えました。

当日の課題は、試技の25分前に出題され、別室において、生徒3人で介護内容を確認したり、対象者の個に応じたオリジナルの介護内容を検討し、準備します。



<参加生徒の感想より>

私達は「元気・勇気・笑顔」を介護理念とし、明るい声と常に笑顔でいることで、対象者の山口さんが安心感を持てる介助を心がけました。

また、事前課題を読み深め、コミュニケーションでは、秋の味覚「かぼちゃの話題」や、「昨年生まれたひ孫さんの話」を取り込み、山口さんとの信頼関係を深めたいと考えました。

さらに2つの作戦を立てました。山口さんがリハビリで豊んでくれたおしぼりで手を拭く、「ほかほかおしぼり作戦」と称し、手を綺麗にするだけでなく、末端をあたため、寒い季節に心も体も温まっていただき、リラックス効果を期待しました。2つ目の作戦は、「ほめちぎり作戦」です。山口さんは、リハビリを行い在宅復帰を目指しています。そのリハビリの成果を伝え、さらに意欲を持って取り組んでもらえるように、声かけを行いたいと考えました。

当日の課題は、デイルームから居室に戻り、パジャマに着替えて就寝するという課題でした。25分間で準備した実践内容は、緊張とあせりから、うまく表現することができず、悔いの残る結果となりましたが、大変良い経験となりました。

<引率教員の感想>

今年度の優勝も、沖縄県真和志高校（2年連続）でした。競技前の元気の良いあいさつから一転し、就寝前ということで、声かけのトーンを少し落とし、最低限の声かけでゆったりとした気分で就寝できるように配慮していた点が、とても印象に残っています。

また、北海道地区の介護技術は高いと感じました。どの高校が全国大会に挑戦してもおかしくありません。いつか、全国大会の優勝旗を北海道地区に持って帰れることを期待しています。

VI 各地区（ブロック）家庭科研究会の一年間の活動状況等

空知管内

◆実施日時 平成 29 年 10 月 6 日(参加者 14 名)

(1)総会

- ・平成 28 年度 事業報告・会計決算報告
- ・平成 29 年度 事業計画案・予算案
- ・平成 29 年度 会員・規約の確認
- ・事務局ローテーションの確認
- ・平成 30 年度 研究会の内容について

(2)研修

「防災教育のためのバッククッキング」

講師 深川市健康福祉課健康推進係
管理栄養士 末 岡 幸 氏

(3)研究協議

- ・各校の取り組みや授業についての情報交換



石狩管内

◆実施日 平成 29 年 5 月 9 日(参加者 37 名)

(1)総会

(2)実践発表・研究協議

「50 分間での体験的学習(実習等)の指導について」

発表者 札幌東豊高校 坂本 景子 教諭
札幌東高校 田中 晴美 教諭

◆実施日 平成 29 年 10 月 10 日(参加者 32 名)

実技研修・研究協議

「縫える！紙の作り方で小物づくり」

講師 北海道ドレスメーカー学院

川村 明美 氏

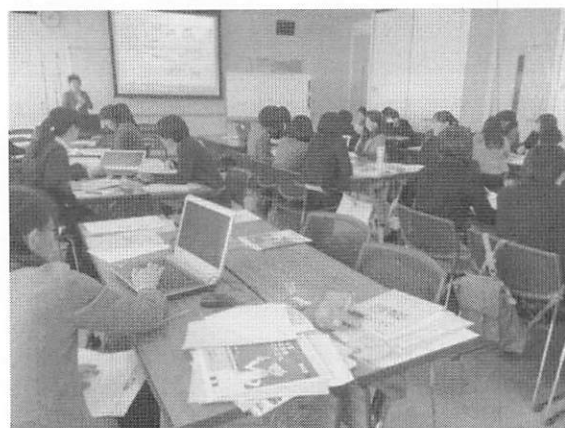
◆実施日 平成 30 年 2 月 6 日(参加者 35 名)

講演・研究協議

『「これであなたもひとり立ち」を使った授業
指導ワークおよび電子教材の効果的な
利用ー』

講師 元新潟県立長岡明德高等学校教諭

渡邊 祐子 氏



後志管内

◆実施日時 平成 29 年 9 月 7 日 (参加者 14 名)

(1)総会

- ・役員確認
- ・平成 28 年度事業報告
- ・平成 29 年度事業(案)

- ・平成 30 年度当番校の確認

(2)研究協議

- ・平成 30 年度家庭科研究協議会運営委員の確認
- ・平成 30 年度家庭科研究協議会提言者の確認

(3)実技研修

「プリザーブドフラワー講習会」

(講師) アトリエMikure

代表 中川 美也氏

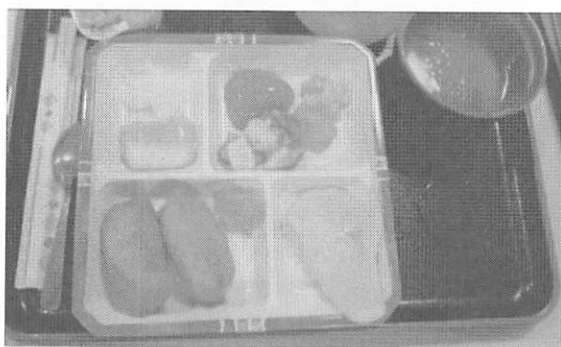
(4)施設見学・体験研修

「介護食体験・施設見学」

(会場) 地域密着型介護老人福祉施設
るすつ銀河の杜

(5) 研究協議・講評

- ・各校の取り組み
- ・講評 北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班主査 佐紺 摂子氏



胆振管内

◆実施日 平成 29 年 9 月 1 日 (参加者 15 名)

(1)総会

- ・平成 28 年度事業報告
- ・平成 28 年度決算報告
- ・平成 29 年度事業計画 (案)

- ・平成 29 年度予算 (案)

- ・平成 29 年度役員

(2)研修会

「若者の性行動の現状と私たちが出来ること」

講師 思春期活動推進会

The Bird and Bees 代表 高村 泰子 様

(3)各校交流会

次の項目を中心に情報交換・意見交流を行った

- ・被服実習の取り組み内容等について
- ・アクティブラーニングの実施内容
- ・効果的だった授業・実習内容等



日高管内

◆実施日時

平成 30 年 1 月 15 日 (参加者 6 名)

(1)講演・実習

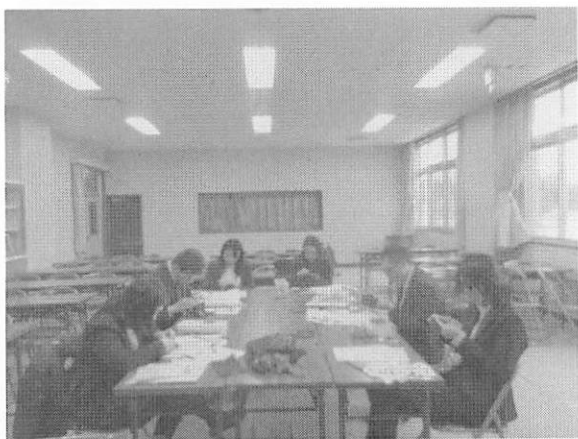
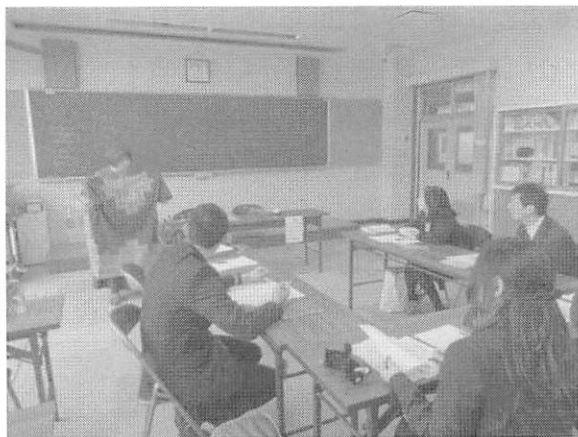
講師：アイヌ工芸家 関根 真紀 様

講演「アイヌ文化について」

実習「アイヌ文様刺繍」

(2)研究協議

「アクティブ・ラーニングを取り入れた指導例」



渡島・檜山地区

◆実施日時 平成 29 年 10 月 19 日(参加者 12 名)

(1)総会

(2)研修講座

Food Science

「食べ物の DNA をみてみよう！

～バナナからの DNA 抽出実験～」

講師：藤女子大学准教授

岡崎由佳子氏



(3)研究協議

①生徒の興味・関心の強い実習・実験のアイディア、手応えのあった教材について

②主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）を取り入れた指導例

※上記テーマのレポート持参

上川・名寄地区

◆実施日時 平成 29 年 5 月 12 日(参加者 19 名)

(1)総会

- ・平成 28 年度研修報告
- ・平成 28 年度会計決算報告・監査報告
- ・上川管内高等学校教育研究会教務部会家庭分科会について
- ・役員改選
- ・平成 29 年度研究協議会計画(案)・予算(案)

(2)研修① 講演

「住まいと防災の基礎知識」

(講師) 北方建築総合研究所 地域研究部
研究職員 馬場 麻衣氏

研修② 演習

「大地震が起こったら～大災害想定ゲーム」

研修③ 見学

北方建築総合研究所施設見学



◆実施日時 平成 29 年 8 月 9 日(参加者 14 名)

(1)研修① 講演

「富良野に根ざした牧場経営について」

(講師) 有限会社藤井牧場

代表 藤井 雄一郎氏

研修② 演習

「演劇の手法を用いたコミュニケーション

スキルアップワークショップ」

(講師) 富良野演劇工場

代表 太田 竜介氏

(2)研究協議

「高齢者生活分野の授業内容の充実について」

◆実施予定 平成 30 年 3 月

(1)役員研究協議会

- ・平成 29 年度研修報告・反省
- ・平成 29 年度会計決算報告・監査報告
- ・平成 30 年度研修計画
- ・各校課題、取り組みについて

留萌管内

◆実施日 平成 29 年 11 月 20 日 (参加者 4 名)

(1) 総会

- ・平成 28 年度事業報告
- ・平成 28 年度会計報告
- ・平成 28 年度監査報告
- ・平成 29 年度事業計画 (案)
- ・平成 29 年度予算 (案)

(2) 公開授業

「大学教授…ときどきイクメン」

講師 藤女子大学 人間生活学科教授

伊井義人 氏

(3) 研究協議 I

- ・公開授業について

(4) 研究協議 II

- ・各校の取り組みと課題
- ・平成 30 年度北海道高等学校家庭科教育研究協議会での提言発表について

宗谷管内

◆隔年度開催のため、本年度実施なし

オホーツク管内

◆実施日時 平成 29 年 10 月 6 日 (参加者 13 名)

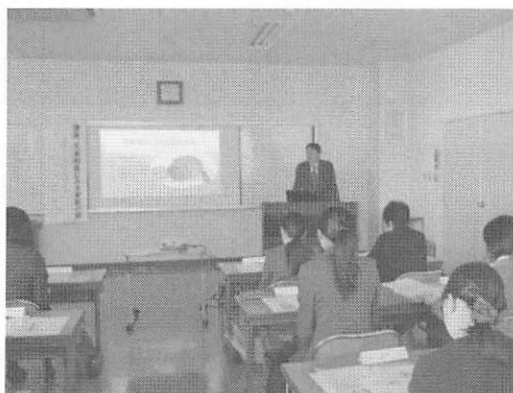
(1) 講演

「児童相談にみる家庭の姿」

講師 北海道北見児童相談所長

(北海道オホーツク総合振興局保健環境部
児童相談室長)

阿部 俊一 氏



(2) 総会

- ・平成 28 年度事業報告及び決算報告
- ・平成 28 年度監査報告
- ・平成 29 年度事業及び予算審議
- ・事務局校、当番校の確認
- ・その他

(3) 研究協議 (情報交換)

「家族・家庭分野について」

※各校の取り組みや課題について、情報交換
を中心とし協議を行い、授業に役立てる。

「教育課程について」

助言者 北海道教育庁オホーツク教育局
教育支援課高等学校教育指導班
工藤 淳 主査

十勝管内

<全体会>

◆実施日 平成 29 年 6 月 6 日 (参加者 21 名)

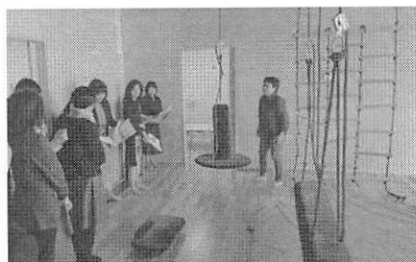
- (1) 総会
- (2) 研究

「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

◆実施日 平成 29 年 10 月 6 日 (参加者 16 名)

- (1) 講演「いのちの話と生教育」
(講師) 誕生学アドバイザー 高田めぐみ 氏
- (2) 見学 上士幌町生涯学習センター
- (3) 研究協議

- ①ブロック研究協議会報告
- ②全道高等学校家庭科教育研究会報告
- ③新学習指導要領について
- ④産業教育実技講座報告
- ⑤教育課程研究協議会報告



<ブロック研究協議会>

研究協議テーマ「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

Aブロック

◆実施日 平成 29 年 9 月 6 日 (参加者 4 名)
被服実習の教材、被服実習指導上の問題点、
1 時間調理実習、L G B T、住まい設計など

Bブロック

◆実施日 平成 29 年 7 月 28 日 (参加者 8 名)
講話「保健師・栄養士から、高校生に伝えたいこと」音更町保健福祉センター職員より

Cブロック

◆実施日 平成 29 年 7 月 26 日 (参加者 7 名)

◆実施日 平成 29 年 10 月 6 日 (参加者 7 名)

エゾシカ肉の有効活用について

釧根地区

◆実施日 平成 29 年 10 月 26 日 (参加者 14 名)

(1)総会

- ・平成 28 年度事業報告
- ・平成 29 年度事業計画 (案) について
- ・平成 30 年度事務局、当番校について

等

(2) 体験実習

「視覚障がい者の介護」

講 師： 釧路明輝高等学校講師
匹 田 美紀子 様

実習内容： アイマスクを装着して歩行
視覚障がい者の移動介助
クロックポジションの実習

(3) 情報交換会及び報告会



VII 特別寄稿

「教員生活を終えるにあたり」

北海道置戸高等学校長 花 田 祐 治

38年前、大学を卒業して最初に赴任したのが「置戸高校」でした。

教師のスタートを切った学校で、教師の幕を引くことに、不思議な縁を感じながら私は去ります。

教員時代に、定期考査の試験監督で家庭科の監督を行っていた時、私が考える答えが語群の中に無く、家庭科の先生に確認したところ、教科書では語群にある答えだということがわかり、その答えは保健の授業では違う表現になっていることから、「同じ出版社の教科書を使用しているのに、保健と家庭科で表現が違うのはどういうことか？生徒は同じことで2つの表現を覚えなければならないではないか」と出版社に抗議し、今は同じになっている部分があります。家庭科との縁やつながりは変なところでつながっていますが、この3年間「家庭部会」には、本当にお世話になりました。

全道唯一の福祉科高校の校長として、皆様の力をお借りしながら、業務に邁進してまいりました。

普通科・総合学科の経験しか持たない。さらには保健体育教員の私にとって、福祉科の学校で何が行われているのか？家庭部会では何が行われているのか？全く見当も付かず置戸高校に着任しました。

1年目はとにかく福祉科の内容、家庭部会の内容や取り組みを知る年となりましたが、印象に残ったのは夏に行われる家庭科の研修会でした。

参加者の数にも驚きましたが、研究発表の内容が充実していることに驚かされました。

また、グループ別体験研修のメニューに、福祉分野が入っていたことにも驚かされました。

早速福祉科の方でも研修会ができないものか、関係する学校へアンケートによる意識調査を行い

ましたが、福祉科の先生達も研修会を望んでいる事を知り、今度はどの時期なら開催可能か、2年をかけて検討を重ねましたが、福祉科の場合校外実習が非常に長く、巡廻指導があることと、1月に介護福祉士の国家試験があることで、長期休業中の研修会の開催は無理であることがわかりました。

次期学習指導要領が公表されますが、すでに公表されている小・中学校の家庭編では、学校種を超えた「縦のつながり」も重視した改訂の趣旨を反映して、小・中学校はもとより高校との関連を図ったことも明記しています。

指導計画作成上の配慮事項では、高校の学習を見据え、教科の狙いを十分達成できるよう基礎的・基本的な内容をおさえた題材の設定、持続可能な開発のための教育を推進する視点から、関係する教科等のそれぞれの特質を踏まえて連携を図ることができる題材の設定などを求めています。

社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となっており、どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、全ての子供たちの生き方に影響するものとなっています。このような時代だからこそ、生徒たちは、変化を前向きに受け止め、社会や人生を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにしていくことが期待されます。

まさに家庭・保健体育・福祉などの教科指導を通じて育むことを目指す資質・能力、学校教育と社会とのつながりについて、地域と学校が認識を共有することが求められます。

今後の家庭部会が、更なる充実を図る事を祈念し、最後の原稿といたします。

3年間、本当にお世話になりました。

「純真でよく働き、智と技とを磨き、 豊かな情操を培いましょう」

北海道千歳北陽高等学校長 小 路 修 司

最後の勤務校となる千歳北陽高校は普通科フィールド制の学校で学校設定科目に特徴があります。家庭科に関する科目でも「福祉と手話Ⅰ・Ⅱ」を置くなど充実した家庭科に関する教育が進められています。その関係で北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会においては豊の障害を持つ生徒が夢について語ったり、翌年は手話を学習した生徒が「福祉の街づくり」について発表し、2年続けて優秀賞や最優秀賞をいただくことができました。日頃の先生方の指導が大きな成果につながっていることを実感することができ大変幸せに感じています。

この文章のタイトル名ですが、昭和 25 年に釧路市立高等家政学院として開校した釧路星園高等学校の校訓です。平成 19 年 4 月に私は教頭の3校目として館山昭校長先生とともに釧路星園高校に着任しました。すでに道立の釧路北高校と釧路西高校、そして釧路市立である星園高校が統合された、釧路明輝高校が開校していました。

北海道にある公立高等学校としては、最後の女子校である星園高校は部活動においても北海道屈指の成績を残しており、スピードスケート部は岡崎朋美さんや三宮恵利子さんなど4名のオリンピック選手を輩出しています。平成 21 年3月に生活文化科と福祉科の二つの学科で最後の卒業生を送りだしました。後輩のいない最後の生徒たちは、閉校を前にそれまで様々なご支援を頂いた地域の皆様や卒業生に対して感謝の気持ちを伝える活動を展開しました。生活文化科では授業

の一環で調理した食事を地域町内会の方々を招き、試食会を開催し、福祉科では介護実習を公開し、介護体験してもらうなど数々の取組を行いました。卒業式の翌週に行われた閉校式では最後の卒業生としてこれまでの学習の成果をしっかりと発揮し、輝く笑顔で主催者役を務めてくれました。次期学習指導要領に示されている「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」をしっかりと主体的に取り組み、「対話的で深い学び」をすでに身をもって示してくれていたように思います。今では少しだけ古いと感じさせる校訓ですが、最後の生徒たちはその校訓に恥じない姿でしっかりと前を向いてくれました。

この間、私は家庭科設置校の教頭研究協議会に参加したり、福祉に関する教科・科目設置校研究協議会の当番校を担当するなど貴重な経験をさせていただきました。また、本誌「こです」の編集担当が当たっていたのですが、教員数が少ない中で閉校事業の取り組みと、最後の卒業生をしっかりと指導し、立派に卒業させる必要があったため、教頭の私が家庭科の教員の肩代わりをすることにしました。慣れない業務で苦労しましたが、関係者の皆さんのおかげで何とか発行にこぎ着けることができました。

これらの経験の中で、家庭科教育において立派な取り組みをしている先生方とお知り合いになる事ができたのは私にとって大きな財産でした。家庭科教育のますますの充実発展を心より祈念し、お礼を申し上げます。

編 集 後 記

感謝の思いをすべて「有難うございました！」の言葉に代えて

まず、始めに・・・「有難うございました！」

ご多用の中にもかかわらず、執筆していただきました多くの皆様方に、心より感謝申し上げます。おかげをもちまして、北海道高等学校長協会家庭部会誌「2018こですHOKKAIDO」が完成しました。

さて、その執筆原稿を拝読するたび、校長協会家庭部会は何といろいろな取組を支援し、活動していることかを実感いたします。また、この家庭部会の記録が「こですHOKKAIDO」と名称を変えてからも（1995年3月～）すでに二十年以上の歳月を経ている事実にも驚きを感じぜざるを得ません。よく「継続は力なり」と申しますが、逆説的には「力があるから継続できる」とも言えます。まさに「力のある家庭部会」の会誌です。

この家庭部会の活動の数々は、諸先輩方から確実に引き継がれ、「こですHOKKAIDO」にまとめられてきました。そして、皆様のおかげで、「2018こですHOKKAIDO」として、新たな歴史が引き継がれました。さらに、ページをめくるもどかしさを愉しめるのも紙ベースであればこそ・・・この良さも引き継いでいきたいところです。

改めて、関係各位の皆様方のご協力に感謝申し上げます。

最後となりますが・・・

本校は、昨年度（平成28年度）から「こですHOKKAIDO」の担当校として、編集・執筆に関わる数々の業務を行って参りました。今年度（平成29年度）は、家庭科 水野 未歩 教諭が中心となって二年目を担い、今、すべての業務を終えようとしています。

次年度（平成30年度）は、北海道当別高等学校が担当となる予定です。どうぞ、これまでと変わらぬご支援、ご協力をお願い申し上げますとともに、「2018こですHOKKAIDO」が、これまでと同様に、多くの高等学校で活用されることを願い、編集後記といたします。

心から「有難うございました！」

平成30年3月吉日

「こですHOKKAIDO」担当校

北海道三笠高等学校長 佐々木 淑 子

北海道高等学校長協会家庭部会　こです HOKKAIDO

発行日　　平成３０年３月３１日
発　行　　北海道高等学校長協会家庭部会事務局
 (北海道江別高等学校)
編　集　　北海道三笠高等学校
印刷所　　社会福祉法人　共友会　札幌福祉印刷
 札幌市西区西町北１５丁目５番７号
 TEL　　(011) 667-7771
 FAX　　(011) 667-9750

こ で す H O K K A I D O と は

Collected papers..... 集 録
Domestic Science..... 家 庭 科
Studies..... 研 究

家庭部会が研修して、それをまとめあげる
こーして仕上げることを、でかすと解釈し
北海道は、「こーですヨ」という意味です